ISSN 0286-5424

京都府埋蔵文化財情報

第 63 号

丹後半島最古の製塩土器の発見—平成８年度平遺跡の発掘調査から—----河野　一隆-----1

内里八丁遺跡第９次の発掘調査----------森下　　衛-----7

長岡京跡左京第384次(7ANVKN-9)の発掘調査----------戸原　和人----13

五領池東瓦窯跡の発掘調査----------有井　広幸----19

－平成８年度発掘調査略報－----------26

10. 天王山古墳群
11. 奈具岡南古墳群
12. 浦入遺跡Ｎ地区
13. 浦入西２号墳
14. 長岡京跡左京第389次・中福知遺跡
15. 長岡京跡右京第541次・脇山遺跡
16. 柿添遺跡第３次

府内遺跡紹介　76. 物集女車塚古墳----------38

77. 長法寺七ツ塚古墳群----------41

長岡京跡調査だより・60----------43

センターの動向----------46

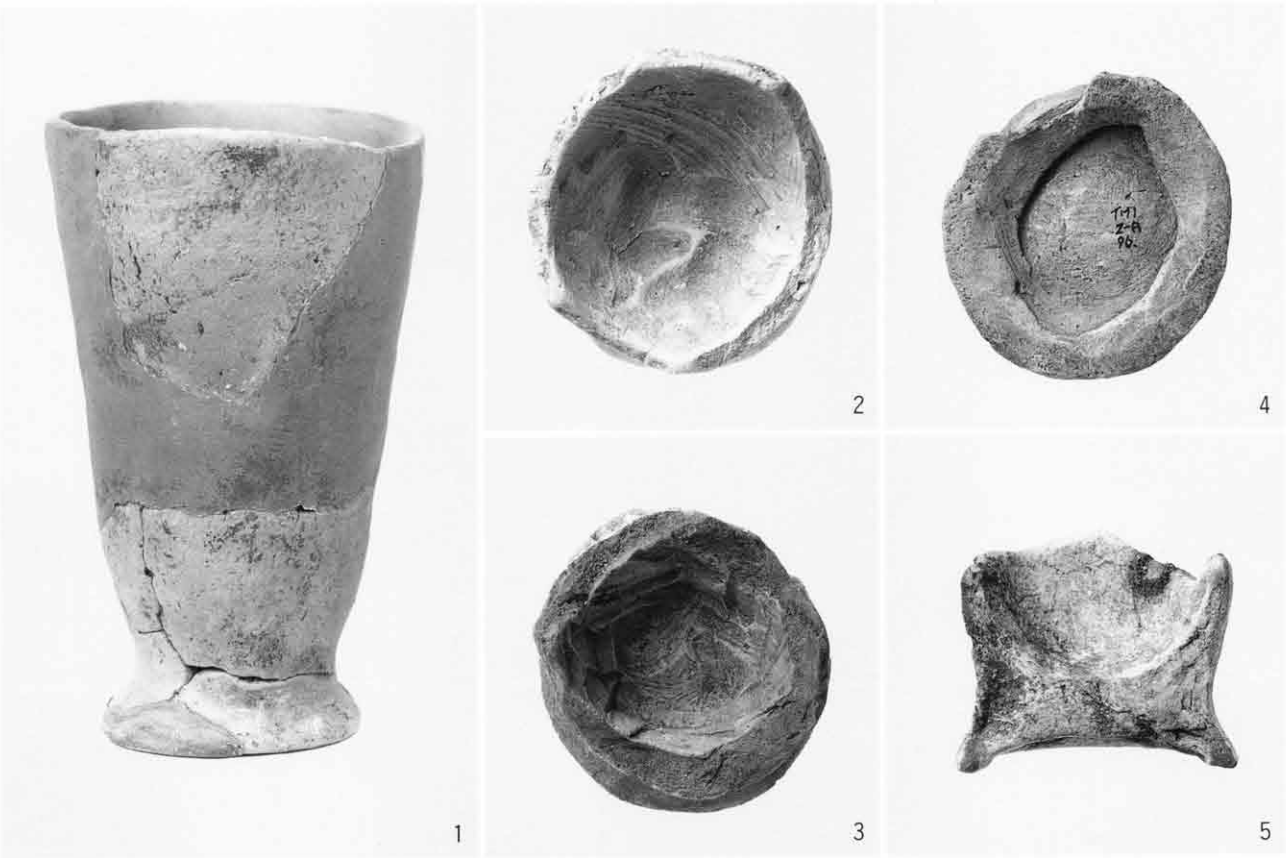
受贈図書一覧----------48

1997年３月

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

巻頭図版　丹後半島最古の製塩土器の発見

(1) 平遺跡(平成 8 年度)調査区全景



(2) 宇川型製塩土器とその細部の形態

丹後半島最古の製塩土器の発見
―平成８年度平遺跡の発掘調査から―

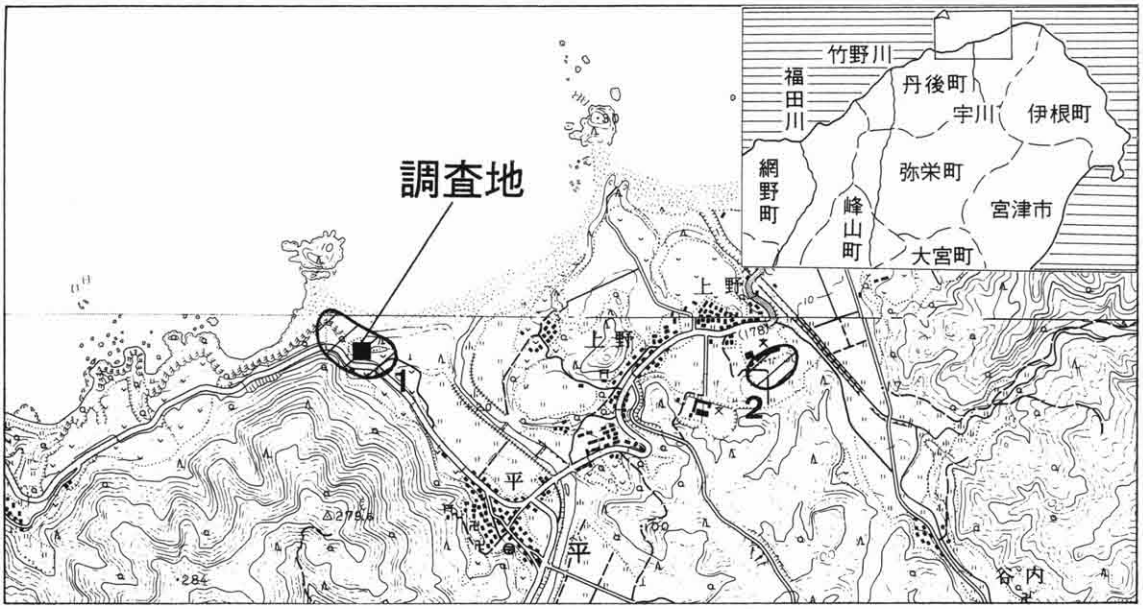
河野一隆

１．発見の経緯

丹後半島の最北部を北流する宇川は、今なお天然のアユが遡上する清流であるが、丹後町平地区で日本海へと流入する。平成８年度の当調査研究センターによる平（へい）遺跡の発掘調査では、丹後半島最古の製塩土器が検出されたので、その概要と系譜をここで紹介することとしたい。この調査は、京都府土木建築部が計画推進している「一般国道178号丹後リゾート関連道路」の改良事業に先だち、同部の依頼を受けて、平成８年８月26日から同年12月５日にわたって、約1,000㎡を発掘調査した(第１図)。

平遺跡は、昭和38年と40年に、同志社大学考古学研究会と帝塚山大学考古学研究室とによってトレンチによる発掘調査が実施された。そこでは、厚さ４ｍに及ぶ砂層堆積の中から、縄文時代前期末から晩期にかけての遺物が検出され、中でも中期末の土器型式に「平式土器」の名が与えられたことで、学史上つとに著名である。今年度の調査でも縄文時代の大量の遺物の出土をみたが、その詳細は次回にして、本稿では古墳時代の遺構・遺物について言及する。

なお、この製塩土器を、本稿では宇川型製塩土器と仮称した(巻頭図版(2)-1)。ただし、この土器は、後述するように製塩土器としての特徴を備えているが、平遺跡でしか検出されておらず、どの程度の地域的広がりがあるかも現段階では不明である。したがって、「平型製塩土器」とす



第１図　平遺跡及び周辺遺跡分布図(1/25,000)

べきであろうが、縄文土器に「平式土器」があって、それとの混同を避けるために、堤圭三郎氏の御教示によって、より広域の地区名である「宇川型」を採用した。今後の類例の増加あるいは研究の進展によって、この「宇川型」製塩土器が別の名称となることも予想されるが、本稿はその問題提起を意図したものである。

2．製塩土器出土の遺構・遺物

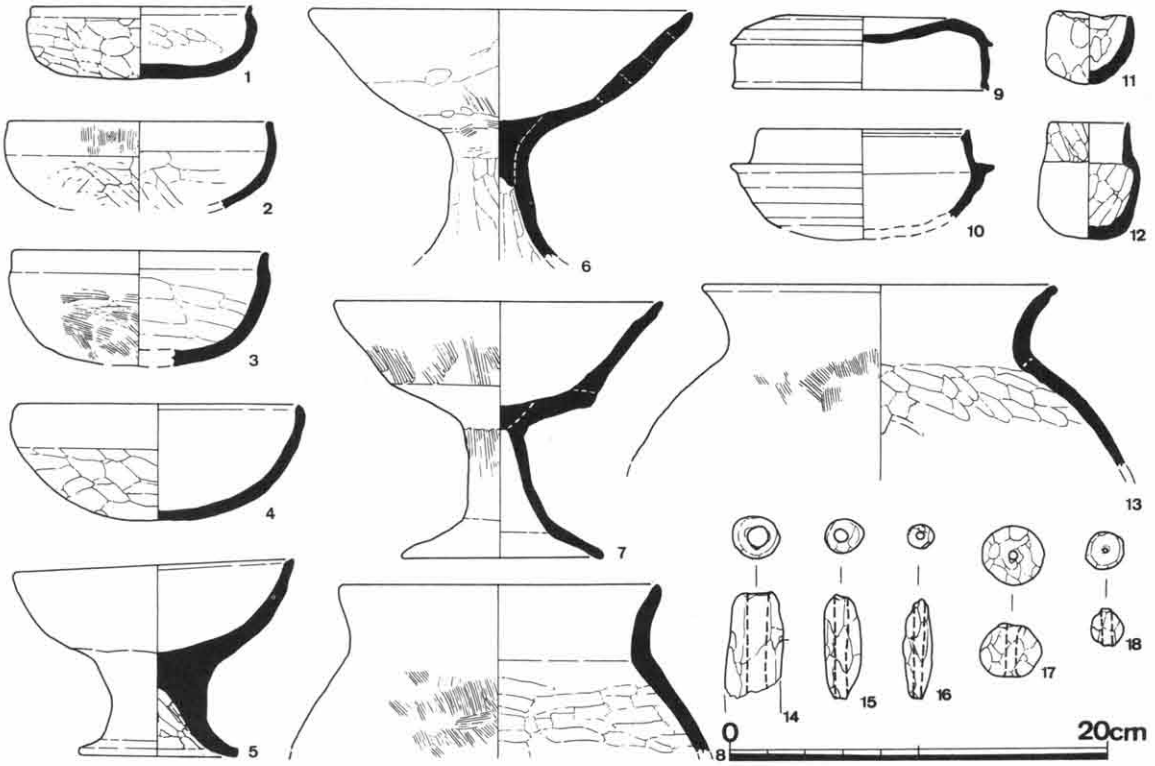
今年度の平遺跡の調査区は、海に向かって緩やかに傾斜するベース面に縄文時代と古墳時代の遺構及び包含層が形成されていた。この内、古墳時代の遺構(第２図)は傾斜と同一方向に掘られた溝とその周囲の人為的な集石から構成され、長さ13m・幅12mを測る。この集石は「V」字状に突出した部分が最も厚い。さらに、その前面の溝には砂利を敷き、溝を隔てた向かい側には巨

第２図　製塩土器が出土した古墳時代の遺構(1/80)

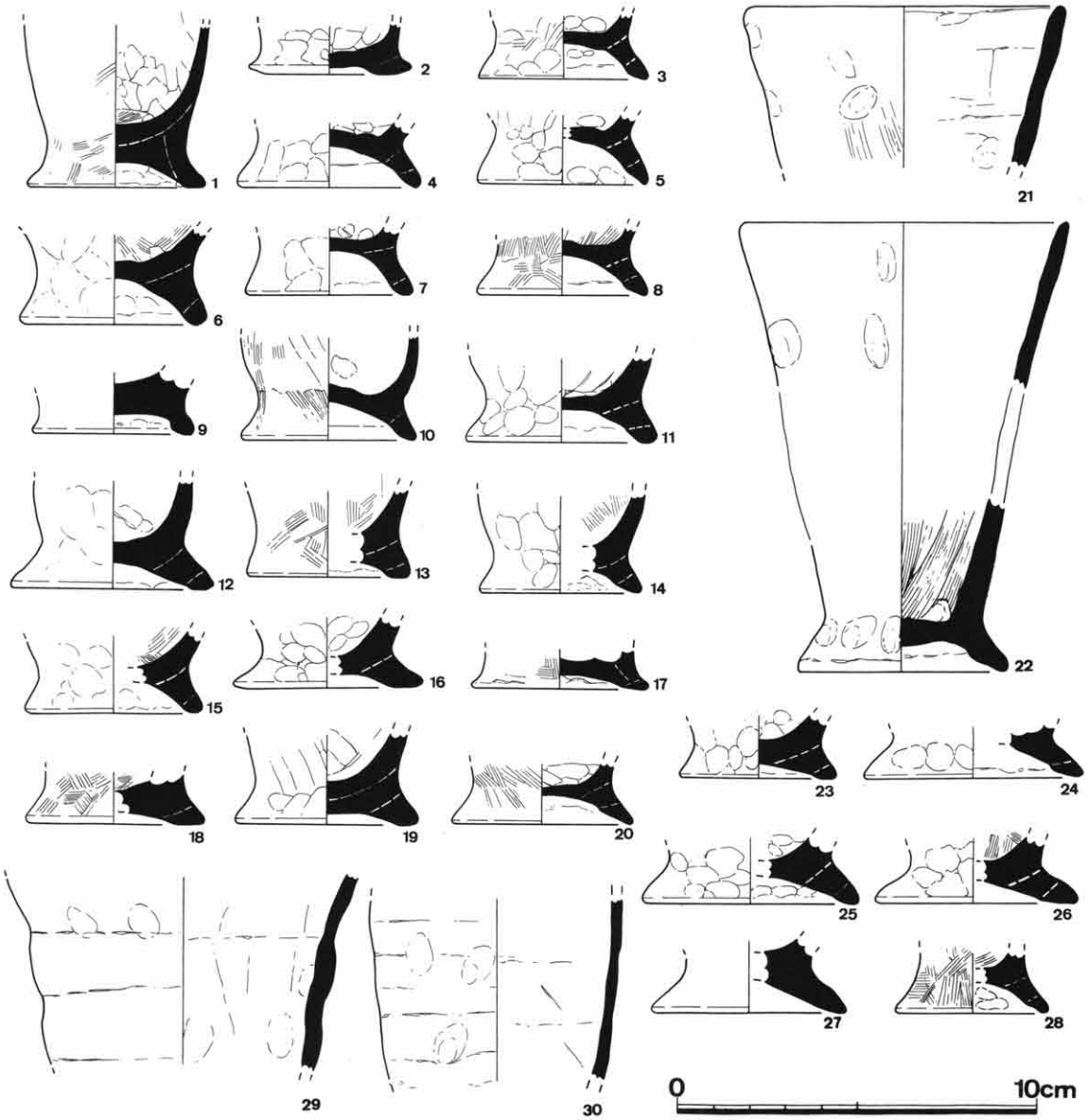
石を据えている。遺物は集石部上面からは少なく、溝埋土の下層出土のものがほとんどであり、２ヶ所の土器溜まりを検出した。ただし、ローリングを受けておらず、時期的にも限定されるという状況から、溝周辺から投棄されたものと想定される。製塩土器は、この溝中の土器群と混在しており、特に集中して置かれたような状況ではない。

この遺構出土の遺物(第３図)は、土師器・須恵器を主体とする土器類、土錘・土玉などの土製品、桃核やクルミなどの植物遺体などが、整理箱20箱前後であり、古墳時代中期後半に限定される。現在も整理が進行中だが、その概要は次の通りである。土師器の器種は、高杯42点、椀24点、壺５点、甕８点、ミニチュア土器８点、甑１点を数え、圧倒的に高杯が多い。完形個体は少なく、意図的な破砕が行われた可能性もある。しかも、高杯３点と椀１点は内・外面に赤色顔料を塗布している。須恵器は、蓋杯10点・高杯２点・甕１点があり、『陶邑古窯址群』の編年によればＴＫ208～ＴＫ23型式に該当する。その内、杯蓋１点は焼き歪みにより天井部が大きく窪み、実用に耐えない(第３図９)。土製品には、移動式竈１点、土錘５点、土玉１点がある。移動式竈は、破片だが、鍔状の廂を貼り付けたものである。土錘には、棒状のもの４点、球状のもの１点を数える。植物遺体は桃核１点、クルミ２点がある。また、松毬10点を溝中から検出したが、これが人為的な投棄か否かは不明である。これら以外に、滑石製臼玉１点を周辺で表採している。

この遺物群は、高杯が多く、丹塗り土器・ミニチュア土器・土玉・桃核の存在から祭祀的性格が強いのが特徴である。また、土錘の存在は、その祭祀が海洋の生産活動と関連したものであることを物語る。さらに、甑及び移動式竈は丹後半島内で最古の例であり、新たに登場した器種をこの祭祀の執行に供したようだ。



第３図　宇川型製塩土器に共伴する遺物群(1/4)

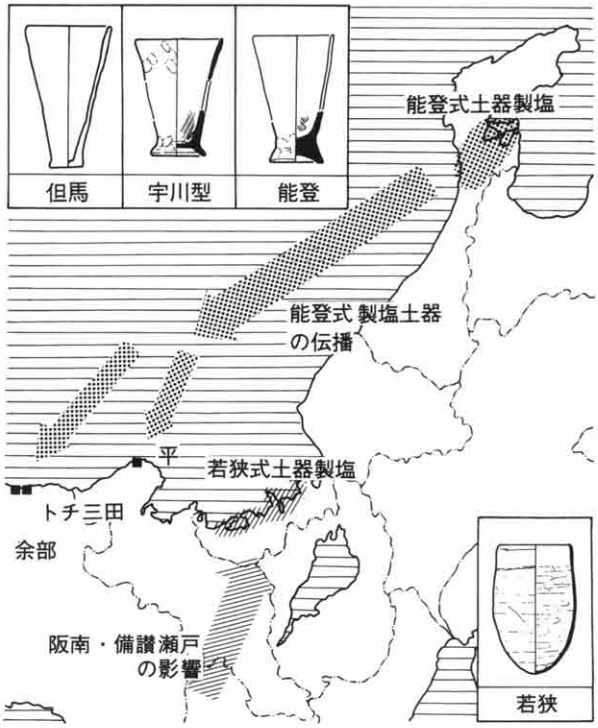


第４図　平遺跡出土の製塩土器実測図(1)　(1/2)
1～28.宇川型　　29.能登型　　30.浜彌Ⅱa式

３．宇川型製塩土器の特徴とその系譜

この遺構からは44点の製塩土器を検出した(第４図)が、脚台付の宇川型製塩土器が30点、丸底の小型砲弾形で若狭の浜彌Ⅱａ式に相当するものが１点、口頸部が強く屈曲する能登式製塩土器(棒状脚付深鉢形土器)が１点であり、宇川型が主体となる。この宇川型製塩土器は、全形がうかがえる資料は少なく、ほとんどが脚台のみであったが、非常に斉一的なつくりをしている。全形は、径５～5.5cm程度の倒盃形底部から直線的に立ち上がる杯部とで構成され、高さ12.5cm程度のタンブラー形である。色調は、外面が被熱してピンク色になっているが、杯部内面は灰白色を呈する。胎土は砂礫の混入が非常に少なく、均質である。製作技法は、脚―杯部を一体に成形して底部を円盤充填するものと、丸底の杯部に輪状粘土を付加して脚台部を作るもの(巻頭図版(2)-4・5)とがあるが、量的には後者が多い。また、脚台部内外面は指頭によって整形するが、

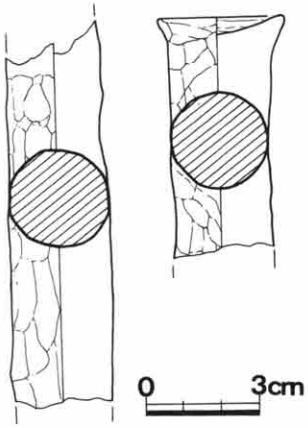
内面に粘土紐痕を残すものが多い。杯部の内・外面調整はナデが主体だが、13点は完全にはハケが消されずに残っていた(巻頭図版(2)-2)。特に、ナデ調整のみのものでも、内面底部付近には工具の当たりが観察できる個体が多く(巻頭図版(2)-3)、この土器は、手捏ねではなく、ハケなどの工具による製作が基本であったようだ。被熱の状況は、脚台内外面が端部から赤化しており、脚台を埋め込むのではなく、石敷炉のように脚台内面にも被熱が及ぶ状況で使用されたことが想定される。



第5図　5世紀後半の日本海岸にみる製塩土器の二者

この宇川型製塩土器は、同時期の若狭や大阪南部の製塩土器とは著しく異なっている。これらの地域では脚台を持たない丸底砲弾形のものが主体であり、それに先行する古墳時代前期～中期前半の倒盃形製塩土器では杯部が大きく内湾する。したがって、杯部が直線的に立ち上がる宇川型は、これらの地域の影響下に成立したものとは考えられない。今回の調査でも若狭の浜彌Ⅱａ式が出土したが、これは外面を指頭調整して粘土紐痕を留めるもので、焼成も宇川型と比較すると硬質である。形態だけに着目すれば、和歌山の目良式製塩土器に類似するが、これは外面調整にタタキを使用した弥生時代後期のもので時期的な隔たりが大きい。そこで、5世紀後半～末に倒盃形脚台を持ち、宇川型製塩土器に類似した形態をもつ地域として、能登半島が想起される。

能登半島における土器製塩は、戸澗幹夫氏によれば(注1)弥生時代終末期の月影式併行期に開始する。その製塩土器は、石川県七尾市祖浜遺跡出土例のような大型倒盃形脚台を特徴とし、ハケ調整された暗赤褐色で砂礫混入度が高い。だが、5世紀後半には小型脚台の製塩土器(戸澗氏分類によるⅣａ類)が斉一的に登場し、七尾市庵製塩遺跡群のように、富山湾沿岸地域を中心に安定した製塩技術が確立するという。この製塩土器は、砂礫混入度が低く、ヘラ状工具及び指頭によって調整するなど、宇川型製塩土器とその特徴ならびに盛行時期が合致し、脚台部の底径も極めて近い。その後、能登では棒状脚の大型製塩土器へと移行するが、その破片とみられる土器が、今年度の平遺跡の調査でも検出されたことは示唆的である。以上の検討から、宇川型製塩土器とは土器製塩の盛行地帯である若狭を飛び越えて、能登半島から直接もたらされたか、あるいは、その影響下に丹後で成立した製塩土器だと考える(第5図)。これが能登式製塩土器の搬入か否かは、慎重にならざるを得ないものの、全国的にみても能登半島と最も関連が強いことは否めないようだ。さらに、その候補地を絞るならば、能登半島内で最も製塩遺跡が濃密な七尾湾岸か、丹後半



第６図　平遺跡出土製塩土器
実測図(2)

島に最も近い外浦沿岸であろう。これは、一見すると突飛な発想のように見えるが、そうではない。隣接する砂層に包含された縄文土器の中には、北陸の中期初頭の新保・新崎式や後期末～晩期前半の八日市新保～中屋式の型式が含まれており、波状的に北陸から丹後への文化要素の流入は、すでに縄文時代から存在したからである。また、この宇川型製塩土器との関連が強い七尾市周辺には、古墳時代前期以来、いわゆる邑知地溝帯の有力首長墓群が展開し、生産技術の拡散の契機となる政治的権力は十分に胚胎していたと考えられる。製塩土器が出土した平遺跡の遺構は見解が分かれてはいるが、丹塗り土器や移動式竈・甑のように、単なる村落祭祀を越えた政治的色彩を払拭できないのも事実である。

４．宇川型製塩土器の評価

宇川型製塩土器の発見によって、丹後地域の製塩土器の登場が、従来の６世紀後半から１世紀近く引き上げられることになった。しかも、若狭に最も近く、舞鶴市浦入遺跡群のような大型製塩遺跡が存在する大浦半島ではなく、外洋に面した平地区でみられたことは、今なお未確認の製塩遺跡が海浜部各地に眠っている可能性を示唆している。特に、丹後半島は潟湖が発達しているので、その外洋との境界の砂嘴部分などは、製塩遺跡の候補地である。ただし、宇川型製塩土器が丹後地域の土器製塩技術にどのようなインパクトを与えたのかは、類例の少ない現段階では分からない。秋山浩三氏が指摘したように[注2]、「丹後の土器製塩の消長は、若狭の影響のもとに存在、あるいは若狭と一帯となって製塩地帯を構成していた」という認識を改めるには、今なお資料不足と言わざるを得ない。

６世紀後半以後、平安時代を通じて土器製塩の中心は舞鶴市の大浦半島であり、丹後半島では伊根町津母などで断片的な資料が知られる程度である。ただ、平遺跡の今年度調査でも、２点だけではあるが、平安時代の塩浜式に相当する土製支脚片(第６図)が検出されている。これは、胎土の質感が大浦半島のものとは異なっているが、平安時代に再び製塩土器を携えた人々が平地区に来たのである。彼らは500年以上昔に、同じ場所で丹後半島最初の製塩土器による生産活動が行われたことは、おそらく知る由もなかったにちがいない[注3]。

(かわの・かずたか＝当センター調査２課調査第１係調査員)

注１　戸澗幹夫「能登式製塩土器―型式分類とその変遷―」『北陸の考古学』　1983年

注２　秋山浩三「第Ⅳ部　京都府(丹後)」『日本土器製塩研究』　1994年

注３　兵庫県香住町教育委員会の坪多正裕氏から香住町トチ三田遺跡の資料提示を頂いた。記して感謝の意を表したい。なお、第５図の但馬の製塩土器は、トチ三田例の復元想像図である。この製塩土器は、従来は古墳時代前期に位置づけられていたが、能登式製塩土器との関連での再検討を提起したい。

内里八丁遺跡第９次の発掘調査

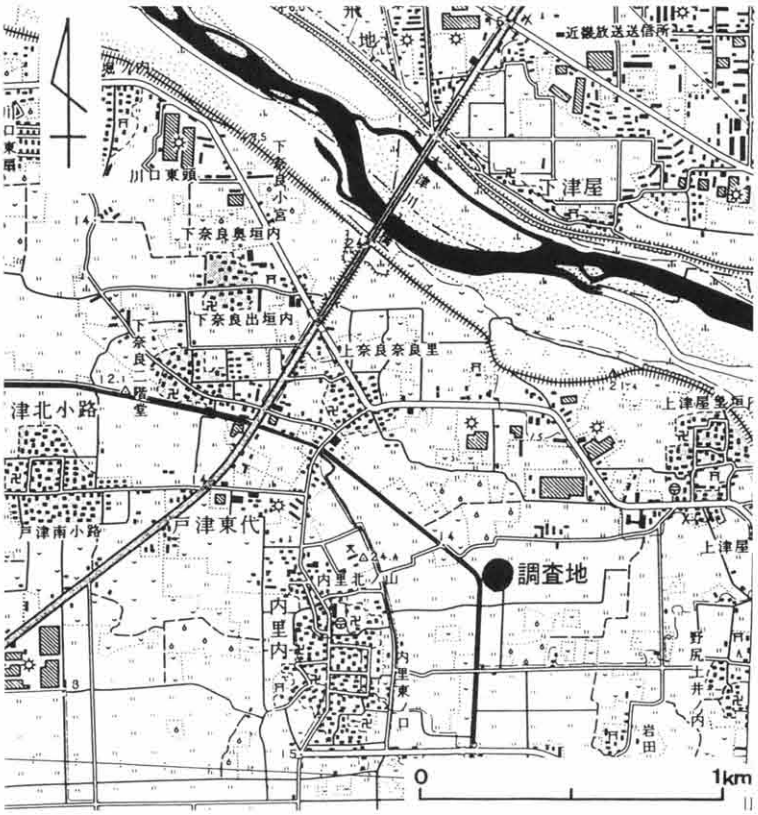
森下　衛

１．はじめに

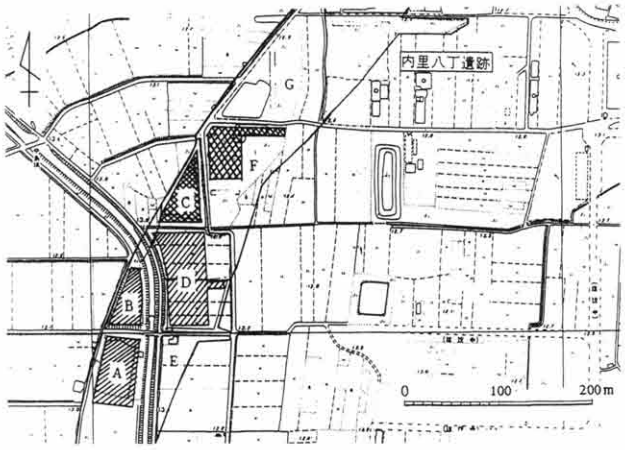
今回の発掘調査は、第二京阪自動車道路建設に先立ち、日本道路公団の依頼を受けて実施した。第二京阪自動車道路建設に先立つ内里八丁遺跡の発掘調査は、広範囲な遺跡をＡ～Ｇの７地区に分け、昭和63年度から順次進めている。平成７年度までに８次にわたる調査を行い、Ａ・Ｂ・Ｄ地区の調査を終了した(第２図)。平成８年度は、これに引き続いて第９次調査として実施したもので、Ｃ地区(約1,800㎡)及びＦ地区の北半部(約2,000㎡)を対象として調査を行った。

内里八丁遺跡は、八幡市の北東部、木津川によって形成された沖積平野に立地する。現在、一帯は平坦な水田地帯といった景観を呈しているが、かつては比較的起伏に富んだ地形をなしていたようで、周囲には木津川の支流だったと思われる旧河道の痕跡なども確認される。遺跡は、この旧河川によって形成された自然堤防状の微高地上に立地する。

なお、内里八丁遺跡の過去の調査では、弥生時代後期終末～古墳時代初頭の集落跡や水田跡、古墳時代中期後半～後期初頭の集落跡、飛鳥時代～平安時代の数多くの掘立柱建物跡、鎌倉時代以降に形成された島畑などが検出されている。特に、奈良～平安時代の遺構・遺物に関しては、遺跡の北方にある上奈良・下奈良という地名から想定される『延喜式』記載の奈良園との関連が考えられるほか、奈良時代には古山陰道がこの近傍を通っていたとの説もあり(注1)、これに関連した何らかの公的施設との関連も想定されている。



第１図　調査地位置図



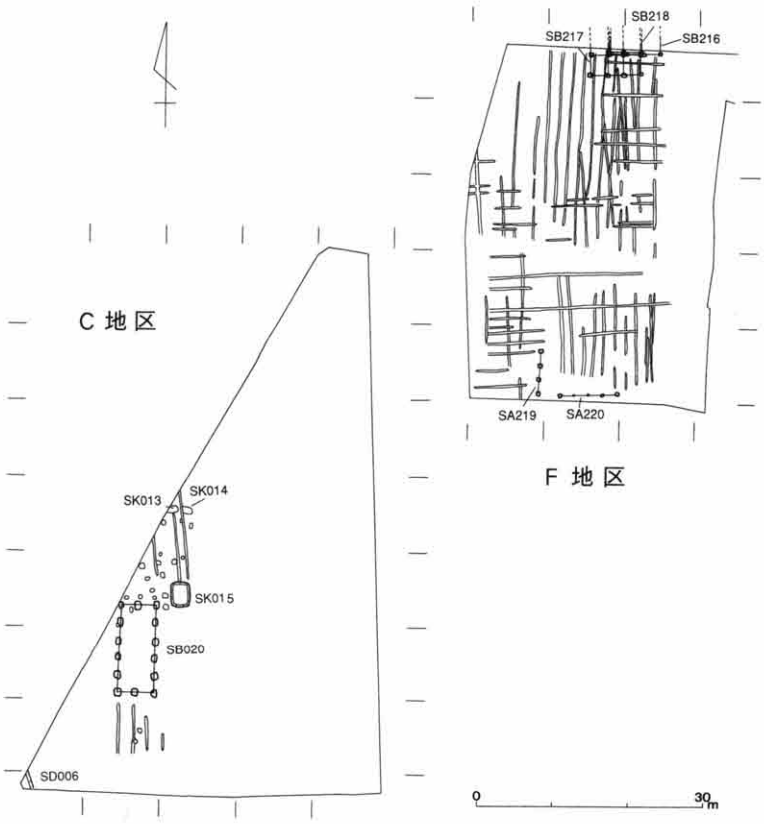
第２図　調査区配置図

２．調査の概要

今年度の調査ではこれまでに、Ｃ地区で４面、Ｆ地区で６面の遺構面を確認し、弥生時代終末期～鎌倉時代にわたる時期の遺構・遺物を確認した。また、これらを時期別に整理すると、弥生時代末期～古墳時代初頭（第Ⅰ期）、古墳時代中期（第Ⅱ期）、飛鳥時代（第Ⅲ期）、奈良時代～平安時代初頭（第Ⅳ期）、平安時代後期～末期（第Ⅴ期）、鎌倉時代以降（第Ⅵ期）に分かれる。うち、ここでは今年度前半期（平成８年９月）までに調査を終えた奈良時代～平安時代初頭（第Ⅳ期）、平安時代後期～末期（第Ⅴ期）、鎌倉時代以降（第Ⅵ期）の３時期に係る調査成果に関して、その概略を報告する[注2]。

(1)奈良時代後半～平安時代前期（８世紀後半～10世紀初頭；第Ⅳ期）

この時期の主な検出遺構としては、Ｃ地区で掘立柱建物跡１棟（ＳＢ020）、土坑３基（ＳＫ013～015）のほか多数の方形柱穴群が、Ｆ地区で調査区の北端部で１ヶ所に重複する３棟の掘立柱建物跡（ＳＢ216～ＳＢ218）、南端付近で柵列と判断している方形柱穴列２条（ＳＡ219・ＳＡ220）などがある。またこのほか、Ｆ地区を中心に多数の素掘り溝を検出している。



第３図　第Ⅳ期主要遺構配置図

掘立柱建物跡の中ではＣ地区のＳＢ020が最も規模が大きく、柱間が全て2.4ｍ（８尺）を測る２×５間の南北棟建物である（主軸は北に向かってやや東へ振る）。ただ、この周囲は鎌倉時代の島畑造成のおりに大幅な削平を受けたため遺構の遺存状況が悪く、これ以外の建物跡は確認できなかった。また、出土遺物がなく、これと同一時期との確証はないが、ＳＢ020の北東部で３×４ｍの方形の土坑（ＳＫ015）を検出している。なお、これらの北側で検出した１×1.5ｍの長方形の土坑

（ＳＫ013・ＳＫ014）は、土坑とするより柵列などを構成する柱穴と理解すべきかもしれない。

Ｃ地区南西隅で検出したＳＤ006は、Ｄ地区で検出した平安時代（９世紀）の溝の延長部にあたる。(注3)

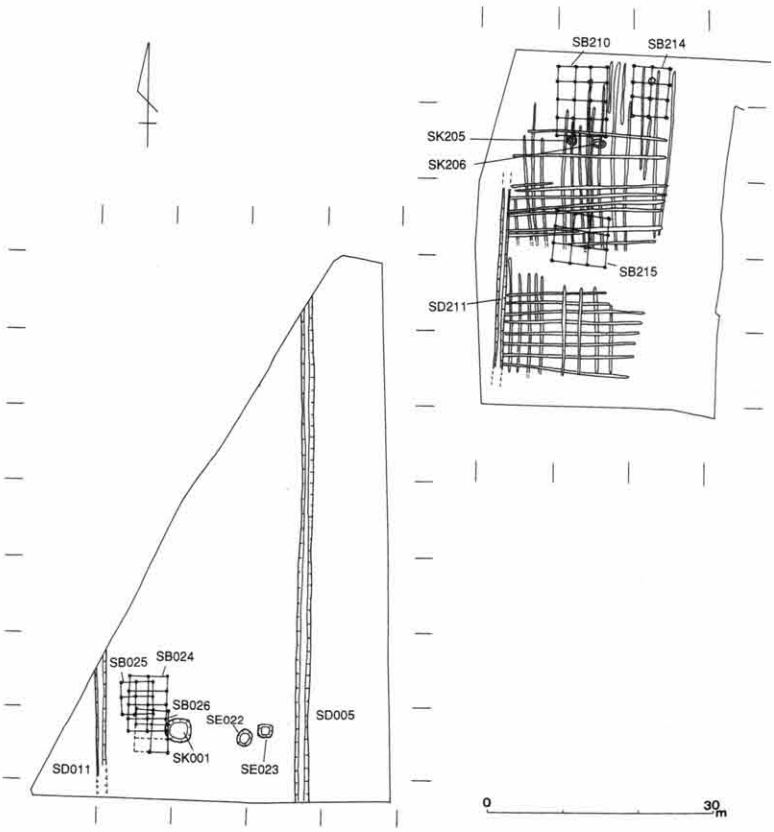
Ｆ地区の北端で検出したＳＢ216～ＳＢ218は、同一地点に重複していた。いずれも東西棟建物と考えているが、大半が調査区域外へのびているためその全容は不明と言わざるを得ない。辛うじてその一端が確認されるＳＢ217は総柱建物であることが確認されており、３×２間の東西棟の倉庫と判断している（主軸は北に向かいやや西へ振る）。

また、こられ以外にＦ地区を中心として多数の素掘り溝を検出している。幅約30cm、断面は緩やかなＵ字状を呈し、畑作の痕跡を示す畝溝と判断している。その方向性や切り合い関係などからＡ群（北に向かい西へ約３度振る）、Ｂ群（Ａ群とほぼ直角に交差する東西溝）、Ｃ群（ほぼ座標北を向く南北溝）の少なくとも３期のものが重複している。時期的には、後述する10世紀中期～後半の遺構群に先行するものと判断され、９世紀～10世紀前半のものと考えている。

(2)平安時代後期～末期（10～12世紀；第Ｖ期）

この時期の主な検出遺構には、Ｃ地区では掘立柱建物跡３棟（ＳＢ024～ＳＢ026）、土坑１基（ＳＫ001）、井戸２基（ＳＥ022・ＳＥ023）、溝２条（ＳＤ005・ＳＤ011）、Ｆ地区では掘立柱建物跡４棟（ＳＢ210・ＳＢ214・ＳＢ215）、土坑２基（ＳＫ205～ＳＫ206）のほか素掘り溝群などがある。

出土遺物などから、Ｃ地区のＳＢ024～ＳＢ026、ＳＫ001、ＳＥ022、ＳＤ011は12世紀前半頃、ＳＤ005、ＳＥ023は10世紀後半～11世紀前半のものと判断している。ＳＢ024は２×４間、ＳＢ026は２×３間、ＳＢ025は２×２間の総柱建物である。ほぼ同一地点で重複して検出した。また、ＳＫ001はＳＢ026の東辺で検出したものだが、埋土中から12世紀後半頃の土器群（瓦器椀・土師皿・羽釜）が出土した。ＳＥ022は径約1.4m、深さ約1.2mを測る円形の井戸で、井戸枠は遺存していなかった。埋土中から12世紀の瓦器椀の破片が出土した。また、ＳＥ023は蒸籠組みの井戸枠を残すもので、一辺1.2mの方形を呈し、深さ約1.5mが遺存していた。埋土中からは11世紀前半の土師皿などとともに延喜通宝、木簡片（判読不能）などが出土した。



第４図　第Ｖ期主要遺構配置図

このほか、ＳＤ011は幅１

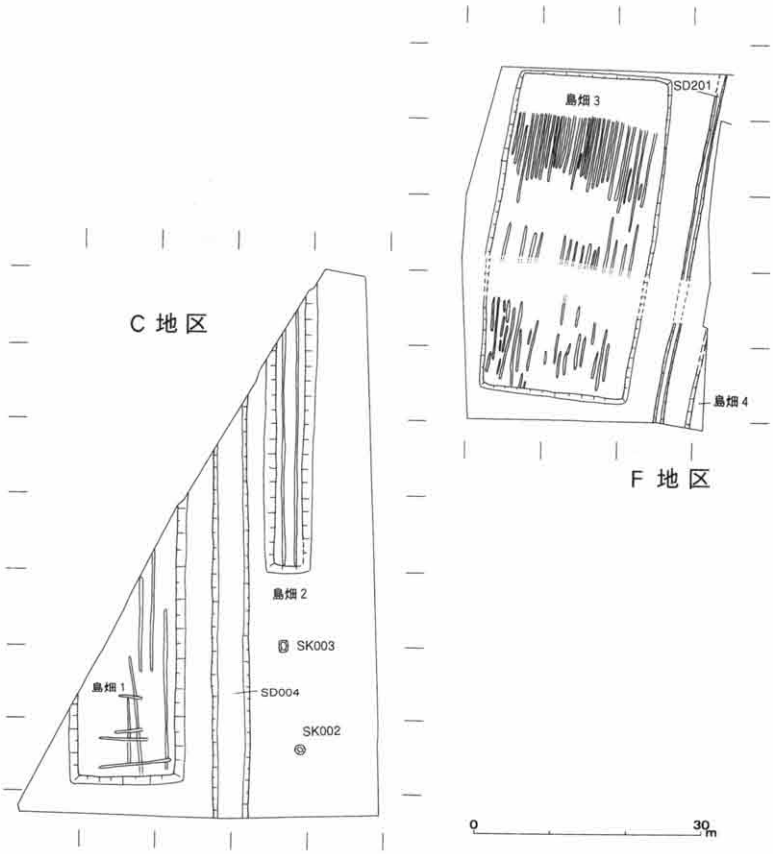
m、ＳＤ005は幅約1.2mを測る南北溝である。

Ｆ地区のＳＢ210・ＳＢ214・ＳＢ215及びＳＫ205・ＳＫ206は、出土遺物などから10世紀のものと判断される。ＳＢ210は３×４間、ＳＢ214は２×３間のいずれも南北棟建物で、ＳＢ215は３×３間でほぼ正方形を呈するものである。主軸は、ＳＢ210・214がほぼ座標北を向くのに対し、ＳＢ215は北に向かって東へ約３度振る。また、第Ⅳ期の遺構と同様、Ｆ地区を中心に素掘り溝群を検出している。やはり、畑作の痕跡を示すものと考えているが、その方向性や切り合い関係などから３時期のものが重複していることが確認される。北へ向かってやや東へ振る南北溝（Ｄ群）、ほぼ座標北を向く南北溝（Ｅ群）及びこれに直角に交差するもの（Ｆ群）の３者である。時期的には、同一面で確認した10世紀の掘立柱建物跡を切るもの、切られるものが混在しており、10世紀中葉～後半を前後するものと判断している。

(3)鎌倉時代以降（13世紀以降；第Ⅵ期）

鎌倉時代（13世紀）以降の遺構は、Ｃ・Ｆ地区とも島畑及び島畑造成直前の土地利用の状況を示す溝・土坑・素掘り溝群である。

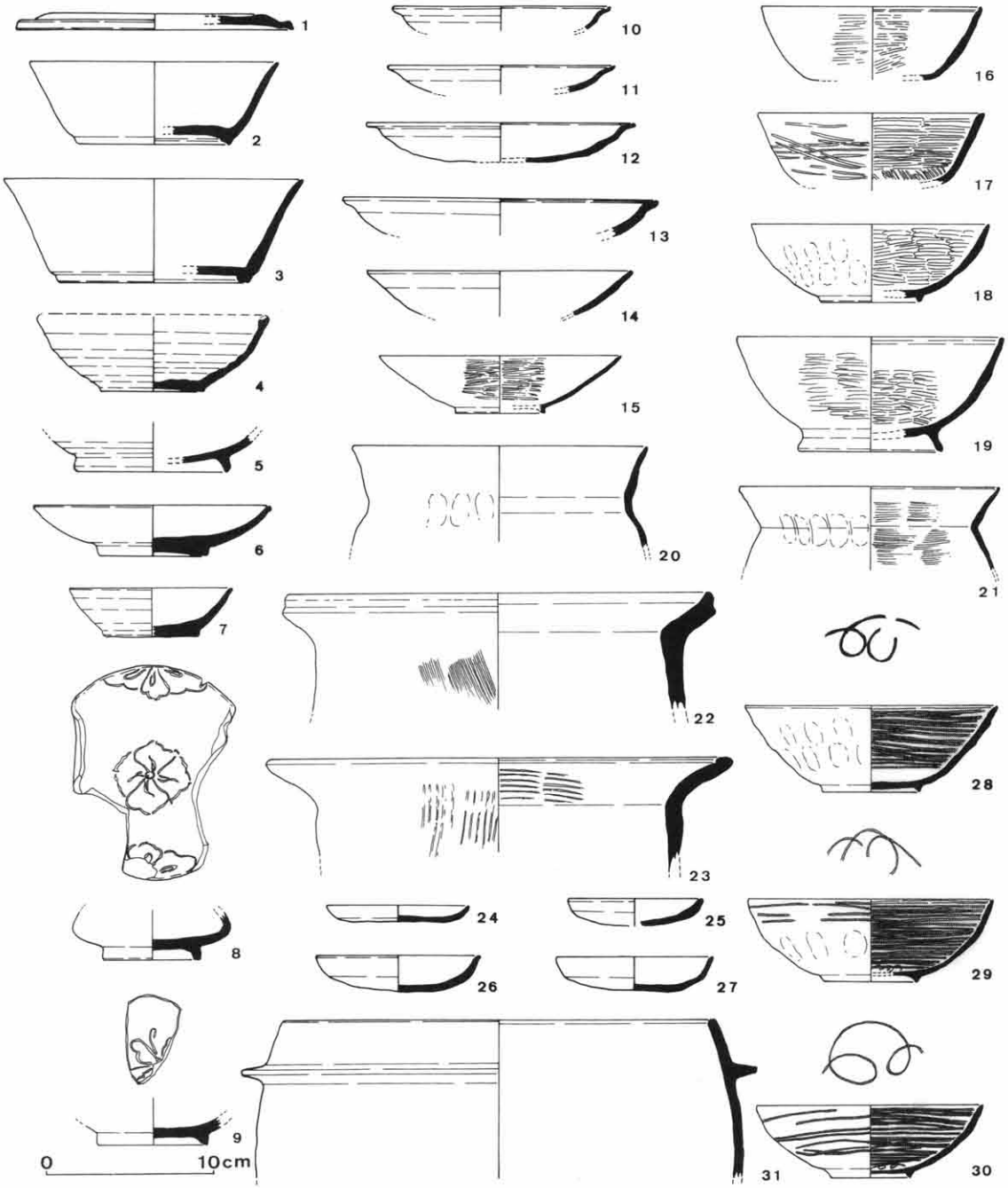
島畑は、Ｃ地区で２基、Ｆ地区で２基の計４基（第５図島畑１～島畑４）を確認した。うち、Ｃ地区の２基は既に削平され現水田下に埋没していたが、Ｆ地区の２基は調査着手前まで畑として利用されていた。Ｃ地区の島畑１は、幅約13mの南北に長い長方形を呈するものだが、北方部が調査区外へのびているため全体の規模は不明である。島畑２も幅約５ｍと非常に細長いものであるが、やはり北側が調査区外へのびる。島畑３は幅（東西）約20m、長さ（南北）約40mの長方形を呈する。島畑４はその北端部を東側へ延ばしたトレンチで、また西辺の一部を調査区の南端部で確認したものでその南側に現在も島畑として延長部が残っている。地表に残る部分を含めると幅（東西）約15m・長さ（南北）約60mに復原される。先にも簡単にふれたが、当地一帯の島畑はもともと微高地であった部分を削りとることによって造成したものが多い。今回の調査で確認したもののうち、こうした方法で造成した島畑



第５図　第Ⅵ期主要遺構配置図

は島畑１・３・４の３基であり、島畑２は周囲の土砂を盛り上げる作業のみで造成されていた。なお、島畑の造成時期については、島畑造成の直前の遺構と認識している溝・土坑などから13世紀中葉～後半頃の瓦器椀などが出土しており、13世紀末葉～14世紀頃であった可能性が最も高いと判断している。

島畑以外では、島畑上面で検出した素掘り溝群（Ｇ群）のほか、Ｆ地区では島畑３と同４の中間部分を南北にのびる溝（ＳＤ201）、Ｃ地区では島畑１と島畑２の間を南北にのびる溝（ＳＤ004）及び野井戸と考えられる土坑２基（ＳＫ003・002）などがある。素掘り溝群及びＳＤ201は島畑とほ



第６図　出土遺物実測図

1～4.須恵器　5.灰釉陶器　6～9.緑釉陶器　10～14・22～27・31.土師器
15～21.黒色土器　28～30.瓦器

ぼ同一の方向性を示しているが、うちＳＤ201の埋土中からは13世紀前半と判断される瓦器椀などが出土しており、ＳＤ004とともに島畑造成直前の地割りに関するものと考えている。また、素掘り溝群は出土遺物がほとんどなく時期の決定材料を欠くが、その検出状況から、やはり島畑造成直前(13世紀後半頃)のものと判断している。

３．まとめ

以上、平成８年度の前半期(平成８年４月～平成８年９月)に行った調査の概要である。

①Ｄ・Ｆ地区を合計すると、平安時代(９～12世紀)にわたる時期の掘立柱建物跡を合計10棟、溝・土坑・井戸などを検出した。

②このうち、Ｃ地区の９世紀後半頃と考えている掘立柱建物跡３は、その規模・形態から単に一般の集落を構成するものとは考え難く、なんらかの公的施設に伴うものの可能性が高い。

③一方、こうした建物跡等とともに、３面にわたって少なくとも７時期にわたる素掘り溝群が検出されており、これらとほぼ同時期に畑作が一帯で行われていたことも確認された。

④素掘り溝群と掘立柱建物跡などは互いに複雑に切り合い関係をもっており、耕作地としての土地利用と居住区としての土地利用では、単純に一方から一方へ変遷したのではなく、平安時代(９～10世紀)を中心として数棟の掘立柱建物跡によって構成される単位集落が遺跡の立地する微高地上で転々と場所を変えつつ存在すると同時に、その間を埋めるように畑地が広がっていた状況を想定している。

⑤その後、11世紀頃の状況はやや不明瞭となるが、12～13世紀には一帯の耕作地化はさらに進み、鎌倉時代以降(13世紀以降)は一帯はすべてが耕作地となり、点々と島畑が造成されるとともに、その周囲には水田が造られていったようである。

⑥なお、こうした遺跡の変遷のうち、平安時代(９世紀)の大型掘立柱建物跡に代表される公的な施設としては、当地の北方にある上・下奈良の地名から想定される『延喜式』巻三十九内膳司条に記載された奈良園がその第１候補としてあげられ、また、11世紀以降の耕作地の拡大や島畑の造成などは、中世奈良庄(石清水八幡宮の荘園)との関連で理解されるものと考えている。

なお、本報文は、共に調査を担当している、古瀬誠三・大岩洋一とともに、調査過程で検討した内容を森下がまとめたものである。

(もりした・まもる＝当センター調査第２課調査第３係調査員)

注１　足利健亮『日本古代地理研究』　大明堂　1985

注２　調査途中における報告のため、遺構などの把握に関しては、今後の検討で変更する可能性もある。また、これまでに行った説明会などの配布資料とも異なる部分があるが、本文が現時点での最も新しい整理内容である。

注３　竹原一彦ほか「第二京阪自動車道関係遺跡平成６年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第67冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1995

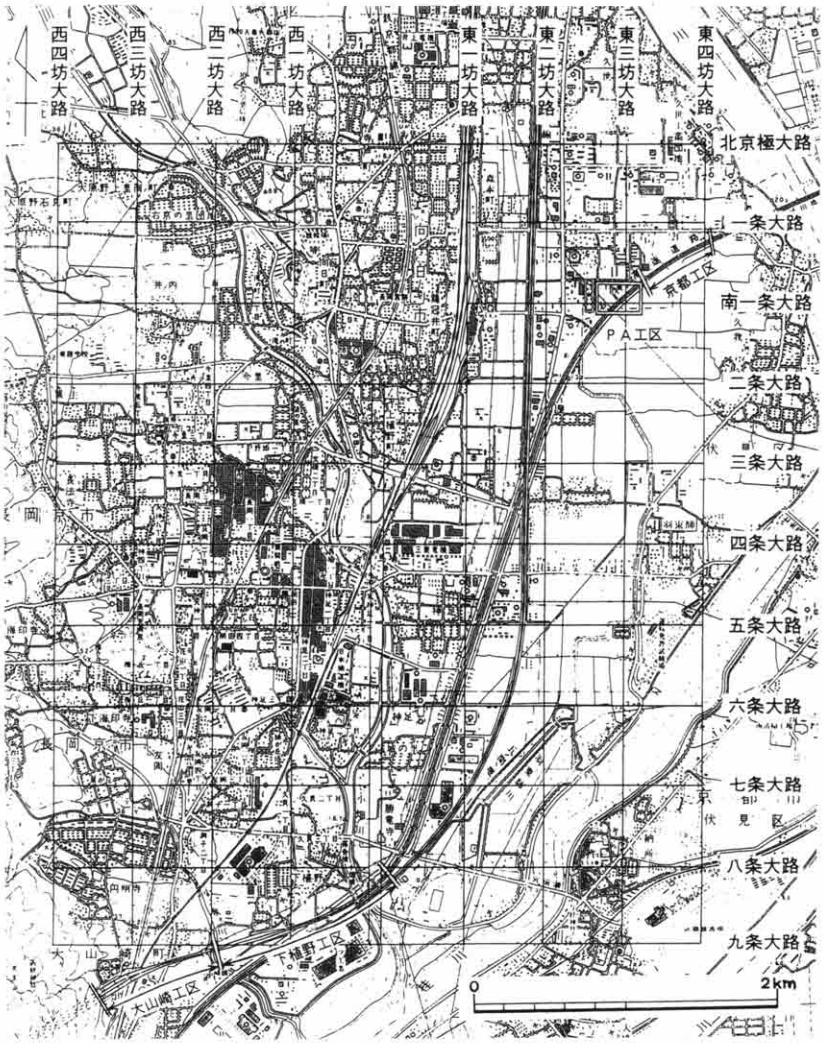
長岡京跡左京第384次(7ANVKN-9)の発掘調査

戸原和人

1．はじめに

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、日本道路公団大阪建設局の依頼を受けて中央自動車道西宮線(名神高速道路)の拡張に伴う発掘調査を昭和63年から実施している。今回の調査地は、京都市南区久世東土川町金井田・正登地内に新設される仮称桂川パーキングエリア(ＰＡ)の予定地内にあたる(第１図)。

調査は、長岡京の東三坊大路の西側に面して、南一条大路(新呼称では二条条間大路)の路面と、その南北の町を想定して行った。大路の北側が左京一条三坊十三町(新呼称では同十五町)で、南側が左京二条三坊十六町(新呼称では左京一条三坊十四町)にあたり、十三町の北半部では、昨年度の調査で多数の掘立柱建物跡や井戸、土坑などを検出している(第２図)。以下では、長岡京を中心とした中層遺構と、下層の弥生時代の遺構について概観したい。



第１図　長岡京跡条坊復原図

2．調査の概要

長岡京の条坊関連遺構では、南一条大路の南北側溝と路面、東三坊大路西側溝と路面の一部を検出した。町内遺構としては、北側の十三町では、宅地内の

南辺溝と東辺溝、築地の地業、土坑、門跡とそこから南北に通じる町内道路の側溝を検出した。十六町では、掘立柱建物跡、柵列、井戸などを検出した。

また、下層では弥生時代と考えられる水田跡や方形周溝墓などを検出した。

(1)条坊関連遺構

溝１　南一条大路の北側溝で、検出幅1.5m・深さ0.35～0.4mを測る。溝の底面では、牛や人間と考えられる足跡を検出した。溝内からは木製鍬が出土した。

溝２　南一条大路の南側溝で、検出幅1.4m・深さ0.4mを測る。溝の底面では、溝１と同じく、牛の足跡を検出した。溝内からは瓦や土器などが出土した。

南一条大路路面　溝１と溝２の心々で25.2m、路面幅は23.6mを測る。路面上では、溝４に沿って３か所で(左京第330次調査を含める)土坑を検出した。路面改良の地業の可能性が考えられる。

溝３　東三坊大路の西側溝で、検出幅1.6m・深さ0.2mを測る。

(2)十三町内の遺構

井戸２　縦板組の井戸枠で、底には縦板でつないだ二段組の曲物を使用している。出土した土器から、平安時代前期に埋まっている。

溝４　十三町宅地内南辺溝で、検出幅0.9m・深さ0.15～0.3mを測る。

溝５　十三町宅地内東辺溝の東肩のみを検出した。

溝６　築地の地業と考えられる溝で、検出幅約１m・深さ0.15mを測る。溝内には灰色土や黄褐色土を２～４層に埋めている。

溝８～10　十三町宅地のほぼ中央に掘られた３本の溝で、宅地内道路の側溝と考えられる。

門１　築地の地業溝６の上から掘り込まれた２基の柱穴からなり、柱心々で３mを測る。北側で溝９・10からなる宅地内道路につながる。

門２　築地の地業溝６が途切れた範囲で幅３mを測る。北側で溝８・９につながる。

土坑１・２　築地雨落ち溝４の北側で検出した土坑で、土坑１は東西11.8m・南北2.4m、土坑２は同じく6.2m×2.1mをそれぞれ測る。土坑の底面には厚さ５～10cmの灰色粘土が堆積していた。

暗渠１　溝１と溝４の間では0.6mの間隔で３本の板を埋めていた。築地の下を潜る暗渠の底板の枕木と考えられる。

暗渠２　溝４は、門１・２の間が狭く掘られており、その東半の門２の位置では0.6mの間隔で３本の板を埋めていた。暗渠の底板の枕木と考えられる。

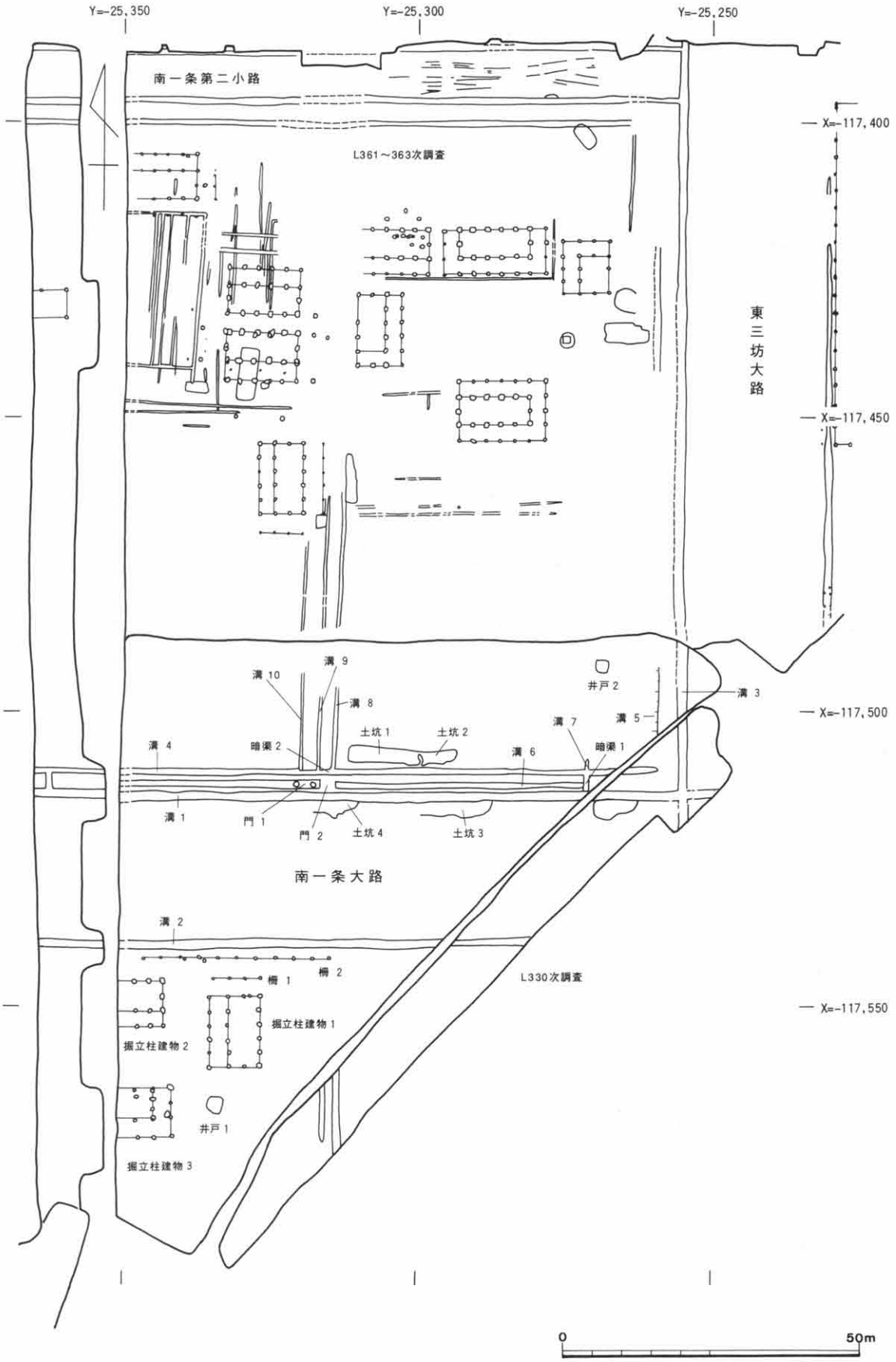
(3)十六町内の遺構

掘立柱建物１　南北棟の建物跡で、梁行２間・桁行５間の身舎で、西側に廂をもつ。

掘立柱建物２　梁行２間・桁行２間以上の身舎で、南側に廂を持つ東西棟の建物跡である。

掘立柱建物３　掘立柱建物２の南側で検出した梁行３間・桁行２間以上の身舎で、東と南側に廂を持つ東西棟の建物跡である。

井戸１　掘立柱建物１の南側で検出した、縦板組隅柱横桟止の井戸枠を持ち、底には曲物を使



第2図　検出遺構平面図(長岡京期・平安時代)

用している。

柵１　掘立柱建物１の北側で、３間分を検出した。

柵２　南一条大路南側溝の南側で検出した柵列で、十六町の西半部の北辺を限るものと考えられる。

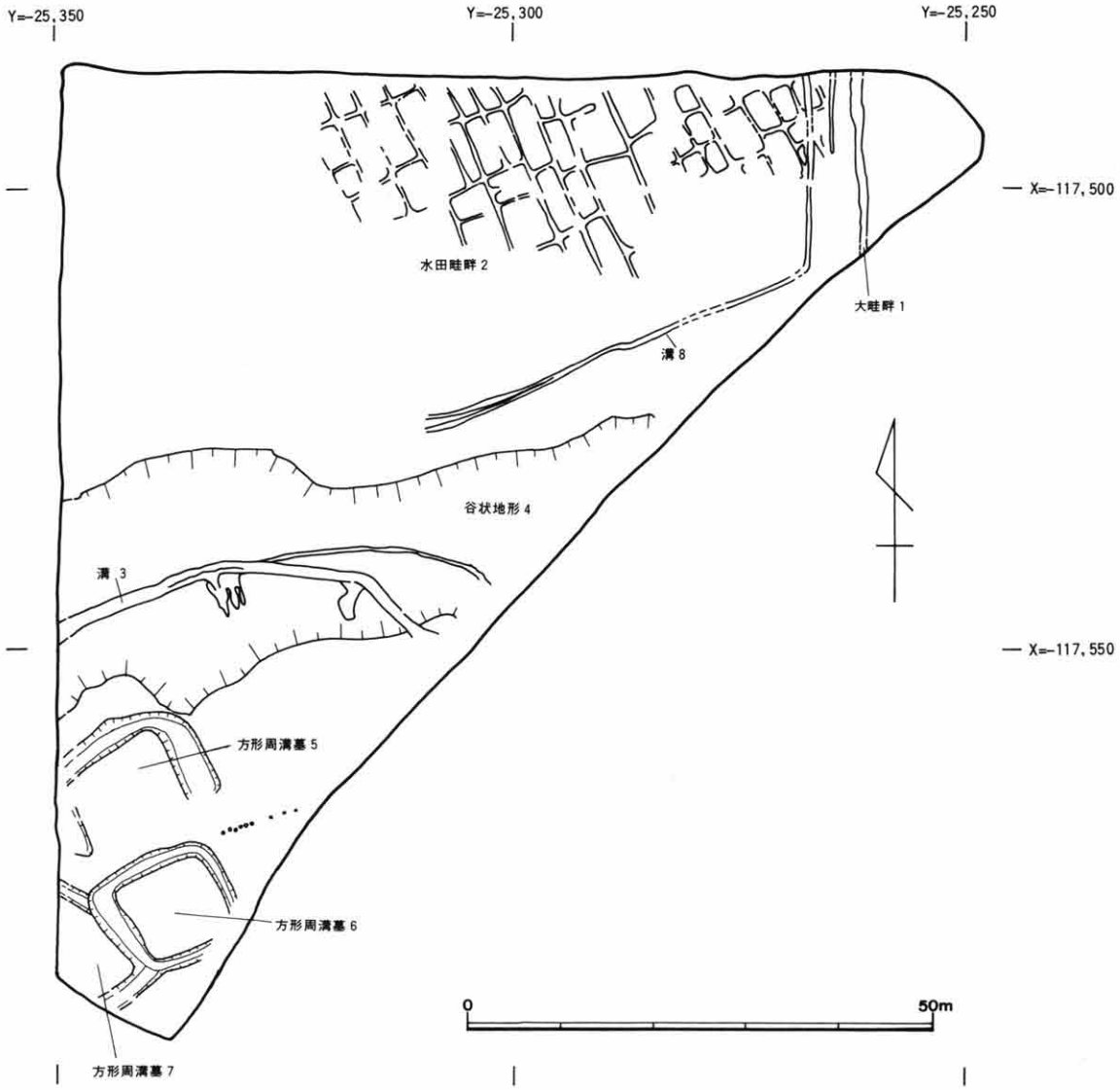
このほかに、左京第330次調査で検出の十六町の宅地を東西に二分する南北溝とつながる可能性のある溝も検出された。

(4)下層遺構(第３図)

大畦畔１　左京第363次調査で検出したＳＦ363109の延長と考えられる。検出幅2.5～3.0m・高さ0.2～0.3mを測る。

水田畦畔２　調査地の北辺よりで50区画を越える水田跡を検出した。水田は、それぞれ幅30～50cm程度の畦によって区画されているが、一区画の面積には大小がある。

谷状地形４　検出幅16～27m・深さ0.6mを測る。南側の方形周溝墓を検出したベースが砂礫



第３図　検出遺構平面図(弥生時代)

層であり、自然堤防の後背湿地状を呈する。

溝３　検出幅1.0～1.2m・深さ0.3mを測る。谷状地形４の最終段階の排水溝と考えられる。溝内からは弥生土器片が出土している。

方形周溝墓５　調査地の南端で検出した。墓域は調査地の西及び南に広がる。周溝内は一辺約11mで、溝幅約2.0m・深さ約0.5mで、溝の断面は逆台形を呈している。また、主体部は確認できなかった。

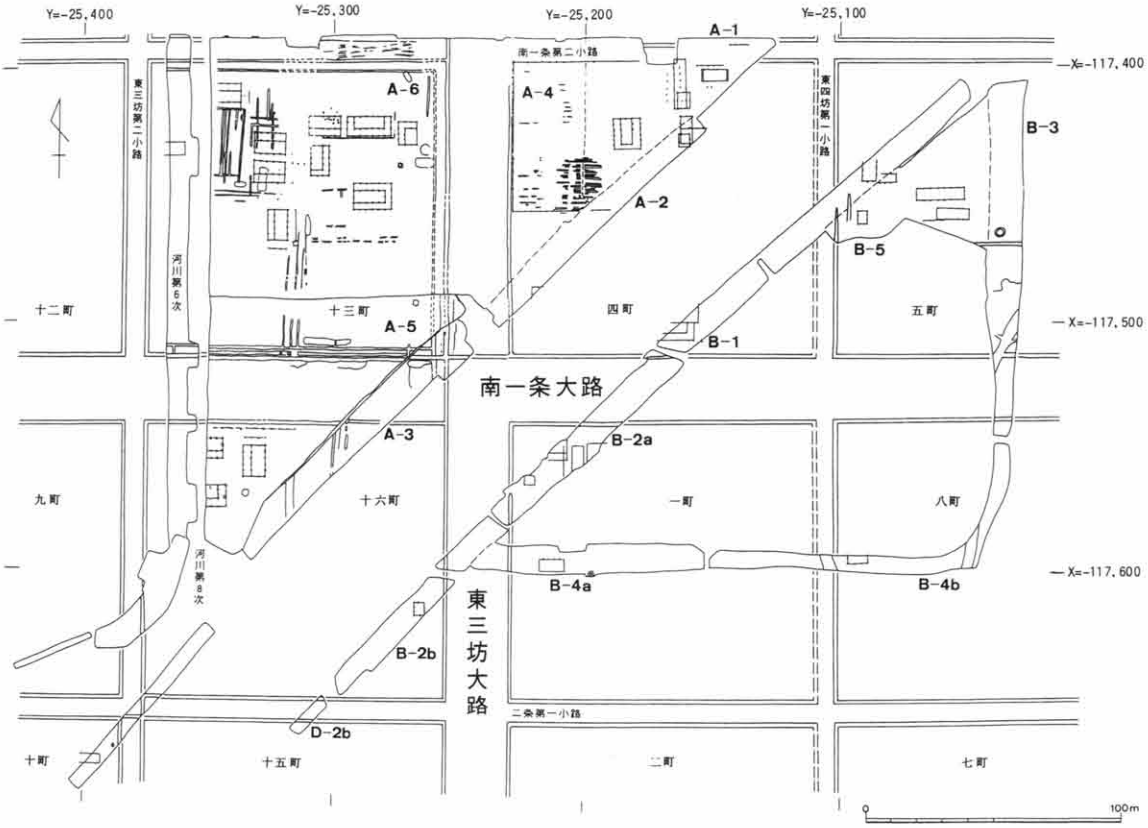
方形周溝墓６　一辺約10mを測り、周溝は幅約1.8m・深さ約0.7mで、溝内からは、中期の壺などが出土した。

方形周溝墓７　南北約７mを測り、周囲の溝は幅約2.0m・深さ約0.5mを測る。西半部は調査地外にのびる。溝内からは遺物はほとんど出土せず、主体部は検出できなかった。

溝８　検出幅0.2～0.3m・深さ0.3mを測る。左京第363次調査地から南北方向に流れ、谷状地形４に沿って南西方向へと曲がっている。水田畦畔２よりも新しい時期の遺構である。

４．まとめ

今回の調査では、長岡京期の十三町の宅地で、南側の大路に面して開く門を検出した。『延喜式』によると、大路に門をひらけるのは三位以上であり、長岡京期に三位以上の貴族は17名しかいないことから、『延喜式』の規定通りだとすると、かなりの高官が十三町に住んでいたと考えられるが、宅地の班給者の地位や、名前のわかるような文字資料は出土していない。



第４図　長岡京期主要遺構図

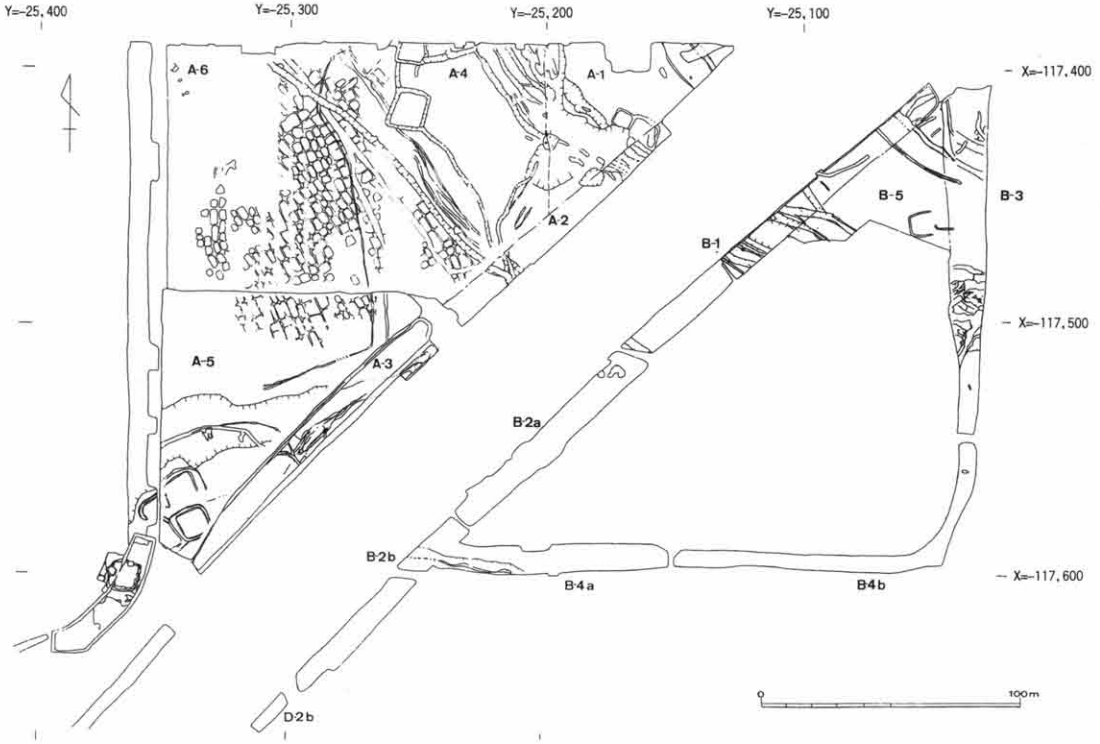
十三町の宅地は、築地によって区画される１町の班給を受けた土地と考えられるが、現在までの調査では、宅地以外の用途を示す積極的な資料を得ていないため、現段階ではこの土地は宅地として班給されたものと考えておきたい。なお、十三町の宅地の所有者については、平良泰久(1996)の論考がある(注)。

また、南側の十六町では、建物の配置や、柵２及び左京第330次調査で検出の宅地内区画溝からみると、少なくとも1/2町以上の宅地班給がなされていたと考えられる。1/2町は、五位以上の貴族に班給されていたと考えられる。

下層で検出した弥生時代の遺構によって、これまでの調査成果と合わせると、東土川遺跡としての弥生時代集落の様相がかなり明確になってきた。調査地の北東部で検出した二重の環濠によって、この北側に集落の中心があったようで、環濠の縁辺部では方形周溝墓群を検出していることから、墓域と考えられる。墓域の西側では、今回の調査例を含めて、150筆以上の水田区画が広がっていることが判明した。水田の南側では、谷地形を挟んで、４基以上の方形周溝墓を検出しており、前記の墓域とは別群と考えられる。

（とはら・かずと＝当センター調査第２課調査第４係主任調査員）

注　平良泰久「長岡京の貴紳の家」（『京都府埋蔵文化財論集』第３集　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1996



第５図　弥生時代主要遺構図

五領池東瓦窯跡の発掘調査

有井広幸

1．はじめに

この調査は、関西学術研究都市開発に関連する、住宅・都市整備公団関西支社の木津団地造成事業に伴い、同公団の依頼をうけて実施した。

五領池東瓦窯跡は、平成５年度の市坂瓦窯跡の発掘調査のおりに、木津町教育委員会の御教示と当調査研究センターの分布調査の結果、新たに発見された遺跡である。調査対象地は、上人ヶ平遺跡・市坂瓦窯跡(注1)の南に隣接する東西方向の小さな谷の中にあって、南向き斜面に３基の平窯が築かれていた。五領池東瓦窯跡は、市坂瓦窯跡に隣接するため、当初その関連性が注目された。しかし、今回出土した瓦から、木津町音如ヶ谷瓦窯跡(注2)と共通する型式のものが多く、音如ヶ谷瓦窯と同様に奈良市法華寺阿弥陀浄土院(注3)所用瓦を生産した瓦窯跡と確認した。

調査は、平成８年５月７日から同年９月27日、調査面積約1,200m²で実施した。

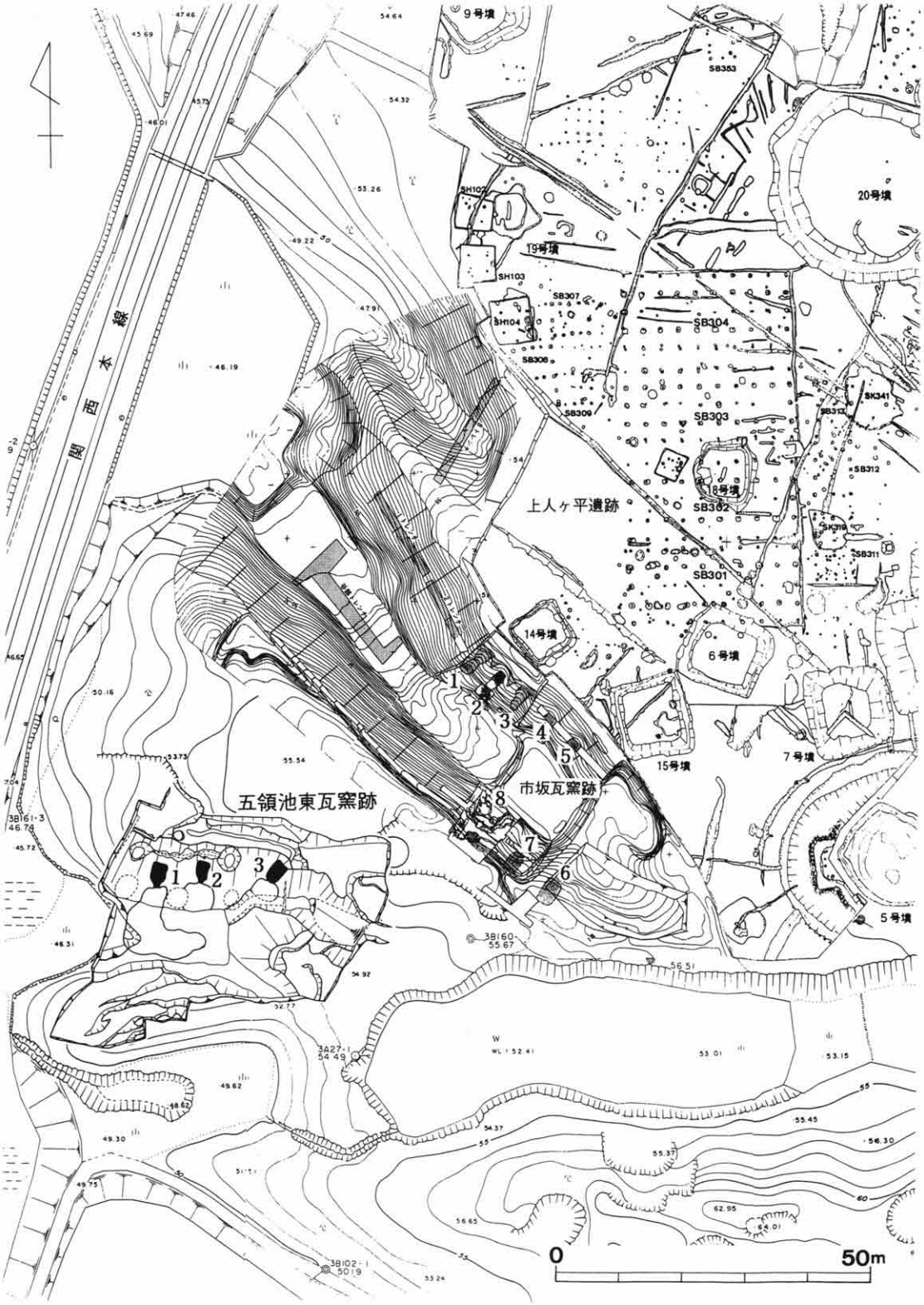
2．調査の概要

調査地付近は、竹林が広がり、筍栽培に伴う土砂の移動により旧地形とはかなり異なっていた。幸い窯付近は盛土が著しく、残存状況は良好であった。また、谷底部分は、窯跡群に伴う灰原が広がっていたが、水田耕作によって東側は削平が著しく、西側の低い部分に残っている状況であった。検出した遺構は３基のロストル式平窯(西から１～３号窯)、１・２号窯に伴う排水溝とそれに関連する土坑２基、灰原、３号窯前庭部付近に東から伸びてくる溝が主なものである。

第１図　調査地位置図(1/50,000)

１号窯　１号窯は、窯の全長約3.6m・焼成室の奥行約1.2m・幅約2.1mの規模で、床には７条の火床が設けられていた。奥壁の表面は、大部分がはがれ落ちているが、北東端が一部残っており、その状況から奥壁は、ほ

ぼ垂直に立ち上がっていたと考えている。掘形はほとんどなく、地山面にスサ入粘土を塗っていた。窯壁の最大残存高は、約1.3mである。両側壁は厚さ約0.2mあり、粘土を主とし一部分に瓦を入れて造っていた。内壁表面はスサ入粘土で全面を固めていた。火床は地山面に丸瓦を一段な



第２図　遺跡周辺図(1/1,000)

らべ、その上に割れた平瓦を置き、スサ入粘土で接着・補強していた。焼成室と燃焼室を分ける隔壁は瓦と粘土を積んで造り、４ヶ所の通焔孔が開いている。分焔柱は割れた平瓦を積み上げ、スサ入粘土で接着・補強していた。火が最もあたる燃焼室側の分焔柱の表面には、完形の平瓦を貼って補強していた(西端は欠損)。

燃焼室は幅約2.1m・奥行約1.5m、焼成室の床との比高差は約0.4mある。両側壁は、粘土を主にして造り、焚き口に近い部分は平瓦、軒平・軒丸瓦の不良品を利用して補強していた。燃焼室床面には、最終焼成時の炭状の灰がほぼ全面に厚さ約0.1m残っていた。焚き口の東側壁は軒平瓦(平城宮瓦型式(以下同じ)6732Fb)を瓦当面を内側に向けて３段重ねて造っていた。西側壁も同様であったと考えられるが、後世の攪乱によって一部を残し壊れていた。焚き口の床中央には、排水用と考えられる浅い溝があり、前庭部に続いている。焚き口は、灰色砂質土と完形の平・丸瓦などを使って閉塞している状況が観察できた。

２号窯　２号窯は、１号窯の東約５mに位置し、１号窯と主軸の方位をほぼ同じにしている。全長約４m・焼成室の奥行約１m・幅約1.9m、窯壁の最大高は約1.3mである。

奥壁では瓦と粘土を使って壁を強化しているようすが観察できた。奥壁の表面は一部に剝落があり、地山面に平瓦片をタイル状に貼った後、スサ入粘土を上塗りし、表面は堅く焼き締まっていた。奥壁上端部は一部内傾化して残っていた。火床は７条あり、地山面に平瓦を積み上げたのち、のし瓦片を主として上面にならべてスサ入粘土で接着・補強していた。隔壁は、焼成室側では垂直に立たず、裾が火床にかぶさるように斜めに張り出していた。このため、焼成室側から通

窯跡群全景(南から)

1号窯全景(南から)

2号窯全景(南から)

焔孔は見えない状態であった。隔壁は、平瓦の完形品を主として、スサ入粘土を挟んで燃焼室側に斜めに積み上げ、焼成室側表面はスサ入粘土を塗っており、窯壁が燃焼室側に倒れ込んだ形跡はなかった。焼成室の両側壁は、1号窯と同様に粘土を主として使い、瓦片を一部使用して積み上げ、内表面はスサ入粘土で仕上げる。

燃焼室は、幅約1.9m・奥行約1.6mを測る。燃焼室の側壁は、軒平瓦(6714A)や平瓦を使って造り上げていた。表面はスサ入粘土を塗っていたようであるがほとんど剝落している。焼成室と燃焼室の床の比高差は約0.4mある。分焔柱は1号窯と同様の造りで、燃焼室側に平瓦を立てていた。焚き口の側壁は、1号窯と同じ軒平瓦(6732Fb)を4枚積んで造っていた。焚き口の天井部分は落下していたが、6732Fbを使って橋掛けにしていた様子が観察できた。2号窯も灰色砂質土と完形の平・丸瓦などを使用して焚き口を閉塞していた。このため燃焼室床面全体に、最終焼成時の炭状の灰が厚さ約0.1m残っていた。

前庭部は、1・2号窯とも焚き口から少し離れると段差があり、2段の構造である。

3号窯　2号窯の東約9mに位置し、主軸方位は1・2号窯よりやや東にふっている。窯の全長は約3.7m、焼成室の奥行約1m・幅約2mの規模で、床には8条の火床を設ける。1・2号窯とも火床が7条であるのに対し、やや変則的である。奥壁は、表面が1号窯と同じようにはがれ落ちていた。窯壁は、1・2号窯と異なり、焼成室、燃焼室、隔壁ともに平瓦と粘土を多用してレンガ状に積んでいた。表面は、スサ入粘土で覆っていたが、ほとんどはがれ落ちていた。隔壁には、4ヶ所の通焔孔が設けてある。

燃焼室は、奥行約1.7m・幅約２m、焼成室と燃焼室の床の比高差は約0.15mである。燃焼室西側は、側壁から続く天井部分が良好に残っていた。天井は、重ね合わせた瓦を芯材にして窯壁から円弧を描いて持ち送っており、外側は地山に近い砂質土で覆っていた。燃焼室の内側はスサ入粘土で塗り固めていたようであるが、ほとんど剝落していた。焚き口は丸・平瓦を用いて閉じていたが、燃焼室床面に炭状の灰は少量残っているのみであった。焚き口の側壁は平瓦を積み上げているだけで軒平瓦は使用していなかった。

３号窯全景(南西から)

前庭部は、３号窯構築時の廃土で溝05を埋めて整地していたが、床面は不整形な窪みが目立っていた。

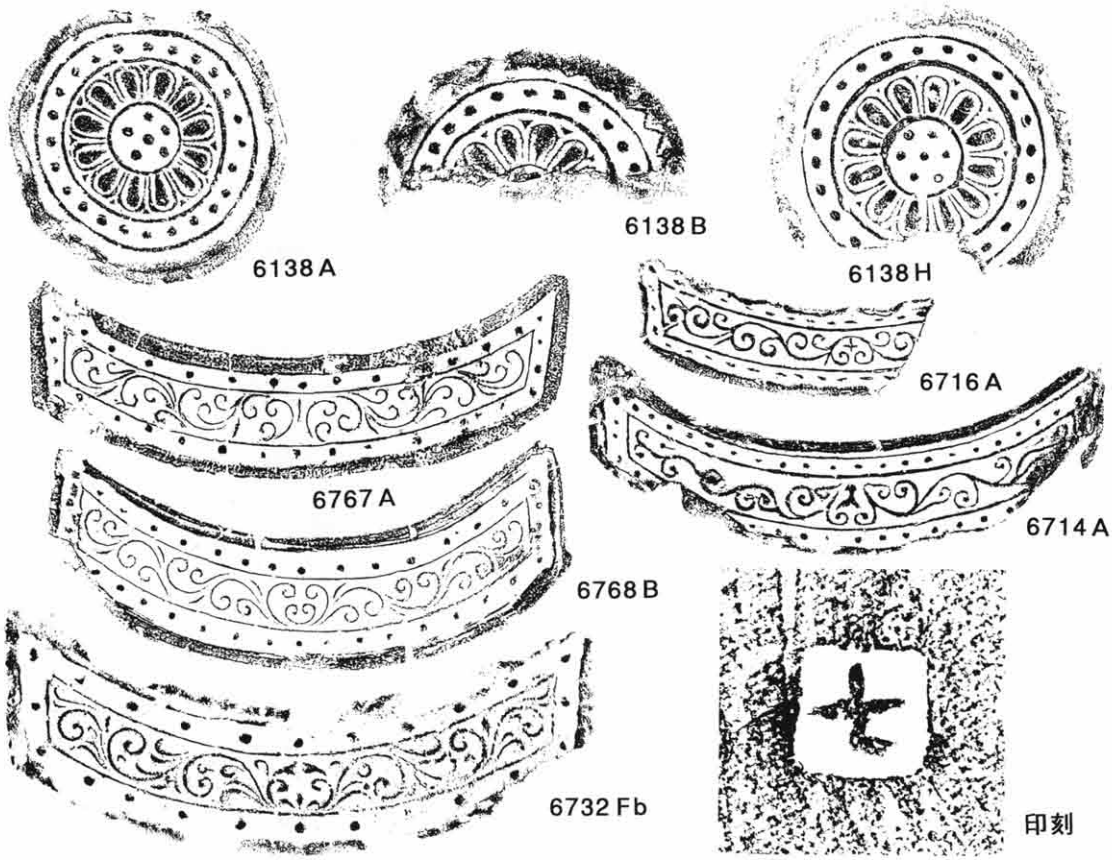
溝01・土坑03・土坑04　１・２号窯の北側の斜面に、幅約１m・深さ約0.2mの、排水用と考えられる溝01が設けられ、その東西両端に土坑03・土坑04が付属していた。溝は浅く、雨水の排水用と考えている。溝01の中には、瓦片が多量に入れられていた。各土坑内は、どちらとも少量の瓦片や炭状の灰がある程度で、不良品などの廃棄用とは考えにくい状況であった。

溝05　幅約10m・深さ約３～４mの溝である。谷地形の続きとも考えられるが、谷奥の北側に偏っており、両側壁も急角度の傾斜を持つことから遺構と考えている。溝底付近からは瓦片が出土し、人工的に埋められたと考えられる土層もあった。東端は、現在のため池につながっている可能性があり、ため池とともに粘土採取跡を想定している。この溝が一部埋まってから、３号窯が造られており、３号窯前庭部周辺に、窯関係の廃土層が広がっていた。

灰原　１号窯の灰原は、谷中央にかけて厚く堆積している。付近からは、多量の不良品瓦が混じり、軒平瓦片も出土した。２号窯の灰原は、谷部分が水田に利用された時に平らに削られたため、斜面にある前庭部分を除いて、あまり残っていない。３号窯に伴う灰原は、前庭部付近ではよく残っているが、それより下手には、ほとんど残っていない。こうした状況のため、各窯の操業順は、灰原の層序では確認できなかった。また、１号窯から２号窯間の谷底部分には、窯構築時の廃土層が灰層の下に広がっていた。

３．出土遺物

出土遺物の大部分は瓦類である。軒平瓦は、6767・6768が主として１・２号窯・灰原から出土している。また、軒丸瓦は、6138A、Hが窯内部や窯壁などから出土している。6714Aは１号窯隔



第３図　出土瓦拓影(軒瓦1/4、印刻実寸)

壁・２号窯燃焼室壁体内から出土している。これらは、音如ヶ谷瓦窯跡・法華寺阿弥陀浄土院跡から出土したものと同型式のものが多く、これらの遺跡と密接な関連があったと考えられる。

この他、軒丸瓦6133A・6716Aも出土している。6133Aは、市坂瓦窯関連の瓦である。また、１・２号窯の焚き口に使われている6732Fbは、東大寺所用瓦である。

また、印刻の例を２種類確認している。１つは「七」と読め、軒平瓦6768Cの凹面に押印する。もう１種類は同心円内に文字らしい形跡(「吉？」)が確認できる印刻である。

文字瓦では平瓦に「夫」と刻んだ例がある。

４．まとめ

小さな谷の南向き斜面に、３基の平窯が確認できた。窯は、いずれも半地下式の平窯で、焼成室に火床をもついわゆるロストル式平窯である。窯の構造は、音如ヶ谷瓦窯跡と共通する点もあるが、通焔孔の数に違いがある。３基の窯は、１・２・３号窯の順に構築されたと考えている。これは、１・２号窯がセットで造られた状況であるのに対し、３号窯は単独で、前記の２基の窯と主軸方位や窯壁の構造が異なること、窯の構築に使っている瓦の量が１・２・３号窯の順で増加すること、３号窯が、溝５がある程度埋まった後構築されていることなどから判断した。

出土した瓦は、音如ヶ谷瓦窯跡、法華寺阿弥陀浄土院跡出土のものと共通するものが多く、五

領池東瓦窯跡で焼かれた瓦も、法華寺阿弥陀浄土院へ供給された可能性が高いと考えている。

窯の操業していた時期は、法華寺阿弥陀浄土院の造営時期を考えると、奈良時代後半(第Ⅳ期・8世紀後半)頃と推定できる。隣接する市坂瓦窯も、この時期に操業していたと考えており、操業時期が重なる可能性もある。

出土品の整理はまだ中途であり、今回は遺構の内容紹介を主とした。なお、窯群付近は盛土工事の予定であるので、一部断ち割りを行って、調査を終了している。

(ありい・ひろゆき＝当センター調査第2課調査第3係調査員)

注1　上人ヶ平遺跡・市坂瓦窯跡は、既に調査が実施され、奈良時代後半に、平城宮大膳職所用瓦を生産した工房跡と、付属する瓦窯跡群(ロストル式平窯8基)として報告がなされている。共に奈良時代の瓦生産の実態を知りうる好例と評価され、保存・整備の方向で関係機関の調整が行われている。

※石井清司・伊賀高弘他「上人ヶ平遺跡」(『京都府遺跡調査報告書』第15冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1991年

※石井清司・森島康雄「木津地区所在遺跡平成5年度発掘調査概要　(4)市坂瓦窯」(『京都府遺跡調査概報』第61冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1995年

※石井清司・森島康雄「木津地区所在遺跡平成6年度発掘調査概要　(2)市坂瓦窯」(『京都府遺跡調査概報』第68冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1996年

注2　『木津町史・史料編』1984年　203～216ページ参照。

注3　『昭和47年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報(2)』　奈良国立文化財研究所　1973年、『平城京左京二条二坊十三坪の発掘調査』　奈良県教育委員会　1984年

2号窯焚き口東壁検出状況(南西から)

平成８年度発掘調査略報

10. 天王山古墳群

所 在 地　熊野郡久美浜町字鹿野

調査期間　平成８年６月12日～平成９年１月22日

調査面積　約2,700㎡（Ａ支群1,700㎡、Ｂ支群1,000㎡）

はじめに　この調査は、丹後西部地区国営農地開発事業に伴い、農林水産省近畿農政局の依頼を受けて実施した。天王山古墳群は、標高40～50ｍの丘陵上に位置し、周辺に多くの古墳・集落跡がある。古墳数は、今回新たに検出した２基を加え、現在21基である。今回は、Ａ支群13・17～21号墳と、Ｂ支群１・２号墳の計８基を調査した。Ｂ－１・２号墳は、来年度調査分でもあり、今回はＡ支群の６基を中心に述べる。

調査概要　調査の結果、凝灰岩を用いた箱式石棺４基（Ａ－13・19～21号墳）、木棺跡４基（Ａ－17・18号墳、Ｂ－１・２号墳）の存在が明らかとなった。墳形は、方墳（Ａ－13・20・21号墳）と円墳（Ａ－17号墳、Ｂ－１・２号墳）がある。出土遺物には、Ａ－17号墳からの小型仿製鏡１点、鉄鏃１点、ガラス製小玉、管玉３点、勾玉１点がある。箱式石棺内の遺物は、Ａ－13号墳のみにわずかに見られる。時期はＡ－13号墳が古墳時代前期、Ａ－17～21号墳が古墳時代中期後半にほぼ位置付けられる。

調査地位置図（1/25,000）

他の遺構としては、Ａ－13・19号墳、Ｂ－１号墳に伴う経塚３基がある。12世紀後半頃のものである。Ｂ－１号墳のものは石囲いの中に土製外容器（蓋付）を納めており、さらに中に銅製経筒を入れていた。銅製経筒の残りは極めて良好である。

まとめ　今回の調査では、古墳時代前期及び鎌倉時代の遺構を検出した。古墳の木棺と箱式石棺という異なる墓制の存在や経塚の形態差から、この地は古くから多くの集団の墓域などに利用されてきたことが判明した。この点からも貴重な資料を得たといえる。

（黒坪一樹）

11. 奈具岡南古墳群

所 在 地　竹野郡弥栄町溝谷小字奈具岡

調査期間　平成８年４月12日～平成９年１月30日

調査面積　約6,200㎡

はじめに　今回の発掘調査は、丹後東部地区国営農地開発事業に伴い、農林水産省近畿農政局の依頼を受けて実施した。調査対象地は、竹野川東岸の丘陵上に位置し、北側に隣接する丘陵上には全長60mの前方後円墳（１号墳）を首長墳とする奈具岡北古墳群、丘陵斜面には弥生時代中期の玉作り工房群及び集落跡（奈具岡遺跡・奈具遺跡）が存在する。

奈具岡南古墳群では、平成６・７年度に５・11号墳の調査を行っている。５号墳は、本古墳群のうち唯一の横穴式石室墳（６世紀末）であった。

調査概要　奈具岡南古墳群は、標高50～60mの尾根稜線上に築かれた、およそ23基からなる古墳群である。今年度は、このうち20基の古墳（２～４・７～９・12～25号墳）の調査を実施した。調査の結果、本古墳群は４世紀後半から６世紀末にかけて築造されたことが明らかとなった。古墳は、尾根稜線上に連続して築かれ、傾斜尾根部では墳丘の高まりのない階段状古墳、尾根の最高所には比較的規模の大きな古墳が展開する。７～15m規模の円墳・方墳・半円形墳が混在し、大多数の古墳が地山削り出しによって墳形を整えている。

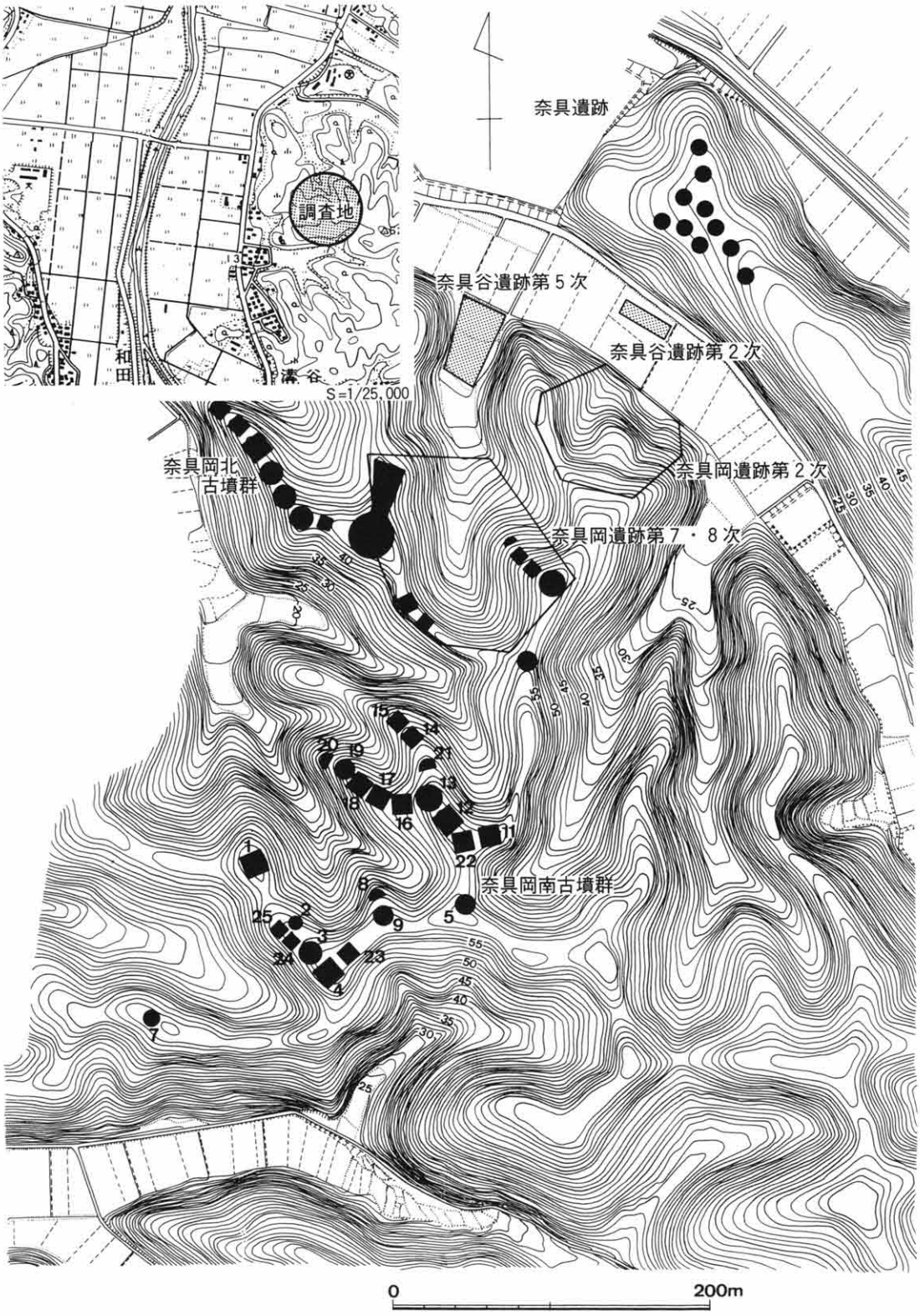
各古墳は、木棺直葬を主要な埋葬施設とし、他の埋葬施設として壺棺・土壙墓が存在する。単独埋葬墳は７～９・20・23号墳の５基に対して、２～４基の複数埋葬を行う古墳は12基を数える（埋葬施設未検出古墳は３基）。墓壙は、地山を大きく二段に掘り下げたいわゆる「二段墓壙」と呼ばれるものである。木棺は、墓壙底の形状から箱形・割竹形・小口を「H」形に収める木棺が使用されている。前期から中期の墓壙は規模も大きくて深いが、後期古墳では小さくて浅くなる傾向にある。

副葬品として、少量の鉄製品か数点の玉類を副葬する埋葬主体部がわずかに認められる。鉄製品には鉄剣・鉄刀・鉄鏃・刀子・鉄斧・ノミ・**鉋**、玉類には滑石製勾玉・緑色凝灰岩製管玉がみられる。また、３号墳第２主体部では棺側部から杯身・杯蓋（ＭＴ15）の出土をみている。その他、前期～中期前半の古墳では、墳丘部から土師器壺・甕の破片が出土している。

まとめ　今回の奈具岡南古墳群の調査は、この地域で調査例の少なかった古墳時代前期の群集墳の調査であり、貴重な成果を得ることができた。前期から中期の古墳は、規模・内容などにおいて弥生時代の台状墓とそれほど変化がないことから、弥生時代墓制を引き継ぐ集団の古墳であることが判明した。また、群中に傑出した古墳は存在せず、ほぼ均質な古墳被葬者の姿が読みとれる。奈具岡南古墳群は、中期中頃の首長墳（１号墳）を擁する奈具岡北古墳群と尾根続きにあり、

両古墳群は同一共同体集団に含まれると判断される。また、首長とは異なった系譜をもつ集団が奈具岡南古墳群を築造したとみられる。

（竹原一彦）



調査地位置図

12. 浦入遺跡Ｎ地区

所 在 地　舞鶴市字千歳小字池カナル（浦入地区）

調査期間　平成８年４月16日～平成９年２月３日

調査面積　約5,800㎡

はじめに　浦入遺跡の発掘調査は、関西電力株式会社が建設を予定している火力発電所の建設予定地内に所在する遺跡について、舞鶴市教育委員会の依頼を受けて実施した。

浦入遺跡は、舞鶴市北東の大浦半島の先端に位置する浦入湾の沿岸部に所在する。浦入遺跡では、舞鶴市教育委員会による分布調査、及び火力発電所建設に伴う試掘調査の結果、縄文時代～平安時代にかけての集落遺跡、製塩・鍛冶などの生産遺跡、古墳などが存在する複合遺跡であることが明らかになっている。

発掘調査は、舞鶴市教育委員会と当調査研究センターが平成７年度から実施しており、平成８年度は、浦入遺跡Ｎ地区のほか、別稿で報告している浦入西２号墳の発掘調査を行った。

調査概要　浦入遺跡Ｎ地区の調査は、平成７年度に、一部、重機による表土掘削を行ったが、本格的な調査は、平成８年度になってから実施した。平成８年度における調査の結果、浦入遺跡Ｎ地区では、ほぼ調査区全域から遺構が検出された。確認された遺構には、竪穴式住居跡・テラス状遺構・流路・鍛冶炉・製塩炉などがある。これらは、大きく奈良時代後半～平安時代前半・古墳時代後期末～飛鳥時代前半・弥生時代後期の３時期に分けられる。また、調査区の南東側（丘陵斜面の低位側）では、縄文時代の遺物包含層を３層確認した。

奈良時代後半～平安時代前半の遺構は、調査区の北側で集中して検出された。また、調査区の南端でも製塩炉と思われる石敷きを確認した。検出された遺構は、テラス状遺構５基・竪穴式住居跡４基・製塩炉２基を数える。これらは、大規模な製塩関連の遺構が検出された浦入遺跡Ｑ地区（舞鶴市教育委員会調査）で出土した遺物とほぼ同時期か、やや先行する遺物が出土している。出土遺物には須恵器・土師器のほか、製塩土器や土馬などがある。テラス状遺構については、居住用の掘立柱建物のほか、製塩作業に関連する作業場・倉庫などとして利用したと考えられる。

調査地位置図（1/50,000）

調査区の南端で検出された製塩炉は、直径

1.2mほどの範囲に角礫を配置して炉床としたものである。製塩炉の前面からは、浦入遺跡Q地区で出土している製塩土器よりも先行する船岡式の製塩土器が出土した。

古墳時代後期末～飛鳥時代前半の遺構は、主に調査区の南側で検出された。検出された遺構は、竪穴式住居跡４基・テラス状遺構１基・鍛冶炉４～５基を数える。テラス状遺構から鍛冶炉がまとまって検出されたことから、この住居跡は、むしろ作業場のような空間であったと考えられる。これらの住居跡からは、須恵器・土師器・鉄滓・鍛造剝片などの遺物が出土している。出土している須恵器は、浦入西２号墳の最終追葬時の須恵器に続くものである。

弥生時代後期の遺構も、調査区の南側で検出され、古墳時代末～飛鳥時代前半の遺構と重複している。検出された遺構は、竪穴式住居跡４基・流路状遺構１～２条を数える。竪穴式住居跡は、標高９～10m付近の丘陵斜面に立地するほか、標高３～４ｍというＮ地区では最も低い場所でも検出されている。また、調査区のほぼ中央に、丘陵斜面を流れる流路状遺構を複数検出した。これらは、調査の結果、縄文時代以降、数回にわたって起こった土石流の痕跡と考えられた。この流路状遺構の１つから、弥生時代後期に所属する大量の弥生土器が出土した。また、銅鏃１点が同じ地点から出土している。出土状況から一括性の高い、投棄された土器群と考えられる。

弥生時代後期の竪穴式住居跡は、わずか４基しか検出されていないが、流路状遺構から出土した大量の弥生土器をみると、浦入遺跡が弥生時代後期には大規模な集落遺跡であったことがうかがえる。

縄文時代の遺構としては、炉跡１基を検出したほかは、顕著な遺構は確認されず、遺物包含層を３層確認できたにとどまる。各遺物包含層は、厚さ１ｍ前後の土石流による堆積と思われる礫層を挟んでおり、層位的に区別することができる。各包含層からは、多数の土器片・石鏃が出土しており、最上層から縄文時代後期前半、縄文時代中期前半、縄文時代早期末～前期初頭に位置づけられる。最下層の遺物包含層は、標高０～１ｍ付近に当たり、同層を中心に花粉分析及び炭素14年代測定を行った。詳細な結果は、正式報告の中で行いたい。

まとめ　浦入遺跡Ｎ地区の調査では、弥生時代後期の集落や縄文時代の遺物包含層など、従来、製塩遺跡として注目されてきた浦入遺跡について新たな知見を得ることができた。特に、弥生時代後期や縄文時代の遺物が多数出土したことは、浦入遺跡の集落の形成が古い時期までさかのぼることを示している。これまでに明らかになった調査結果は、浦入遺跡のみならず、舞鶴市内あるいは若狭湾周辺の人的・物的交流を考える上で重要な資料となると思われる。

（筒井崇史）

13. 浦入西２号墳

所在地　舞鶴市字千歳小字浦入日向

調査期間　平成８年８月１日～平成９年２月27日

調査面積　約600㎡

はじめに　この調査は、関西電力舞鶴火力発電所建設に伴い、舞鶴市教育委員会の依頼を受け実施した。浦入西２号墳は、大浦半島先端の舞鶴湾入り口部分の丘陵に位置する。北西に遠く丹後半島を望み、東側の眼下では縄文～平安時代の集落遺跡や製塩・鍛冶工房などの生産遺跡である浦入遺跡の調査が行われており、特に奈良～平安時代にかけては大規模な製塩遺跡として知られている。

調査概要　浦入西２号墳は、直径11m・残存高1.4mを測る円墳である。外表施設として墳丘東側半分の裾部には、１～３石を高さ約50cm積み上げた列石が施されている。北側には、自然地形と区画する浅い幅２mほどの区画溝が設けられている。墳丘中央部で石室主軸を尾根に平行し、南に開口する竪穴系横口式石室を検出した。

石室全長4.2m、玄室長2.45m・同幅1.7m・残存高1.15m、玄門部幅0.8m・羨道部幅0.6mを測り、玄室内床面には0.5～４cmほどの玉礫を全面に敷き詰めていた。玄門部では、羨道部より玄室に入るには階段状に降りる構造をしており、その部分には偏平な石材を置いている。この段差は約15cmである。

初葬時の面は存在しないが、追葬に伴ってかたずけられた遺物として、奥壁・西側側壁に沿って須恵器杯蓋２セットと蓋１点が出土した。これとセットとなる杯身は、玄門付近に散乱していた。そのほか、鉄鏃７点・刀子１点・環状鉄器１点・飾り金具１点が出土した。

追葬は、初葬時の床面をかたずけた後、棺を安置する部分のみ新たに玉礫を敷きつめており、初葬時に比べて細かい。棺は、ほぼ玄室中央部に安置され、棺内北端では杯身・蓋を利用した転用枕がみられた。周辺からは、鉄鏃３点・刀子１点が出土した。

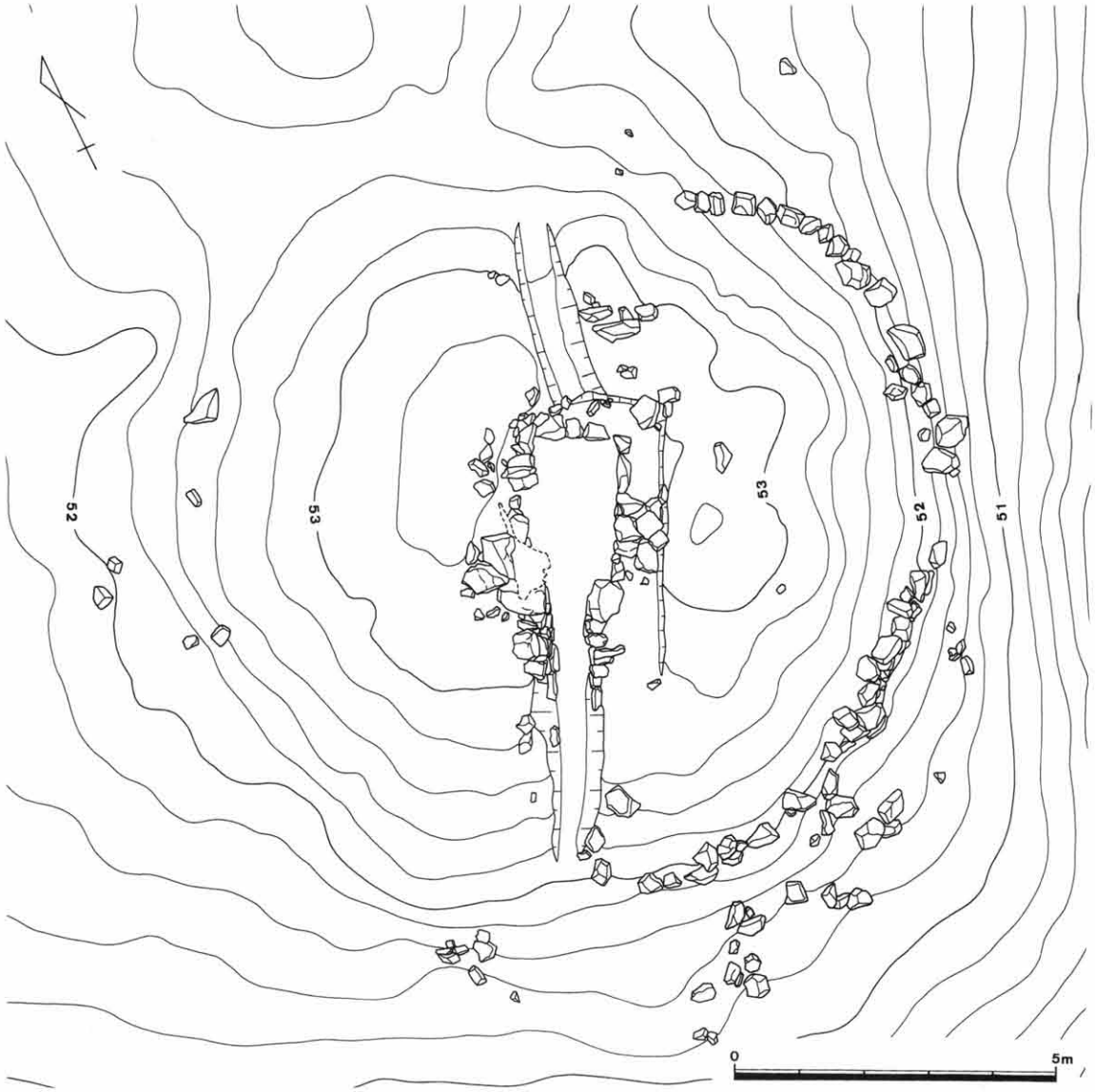
最終追葬面は、追葬面に約10cm盛り土し、東側側壁に沿って偏平な石材２石を配して棺台としている。玄門部の階段状の石材もこれに伴って、さらに１石新たに積まれている。棺台周辺

第１図　調査地位置図(1/50,000)

では遺物の出土は見られなかったが、玄門部の階段状の石材の玄室側で、須恵器杯身３点・蓋２点が、また棺台周辺からは、刀子２点・鉄鏃３点が出土した。出土遺物から、初葬は６世紀中頃、追葬は６世紀後半、最終追葬は６世紀末に行われたと考えられる。

まとめ　舞鶴市内では初の竪穴系横口式石室の調査となった。この種の石室は、丹後半島・若狭で調査例はあるが、中間地域である舞鶴市で調査されたことによって、周辺地域との関連を考えていかなければならない。また、眼下で調査されている浦入遺跡では６世紀後半に集落が形成されていることが明らかになっているが、この古墳はそれに先行するものであり、集落と古墳との関係を考えた場合注目される。

（増田孝彦）



第２図　浦入西２号墳地形図

14. 長岡京跡左京第389次・中福知遺跡

所 在 地　向日市上植野町池ノ尻・大門

調査期間　平成８年７月26日～平成９年１月14日

調査面積　約1,780m²

はじめに　長岡京跡左京第389次・中福知遺跡の発掘調査は、京都府土木建築部住宅課が進める府営上植野団地建設に伴う事前調査として、同課の依頼を受けて実施した。同建設に伴う発掘調査は、平成６年度から継続して実施しており、古墳時代前期の耕作に関係する溝や土坑、約800本の杭からなる奈良時代の護岸施設、東一坊坊間東小路(旧東一坊第二小路)と四条条間小路(旧三条大路)の交差点、長岡京期から平安時代前期にかけての池沼、平安時代後期の集落、中世素掘り溝などを検出している。

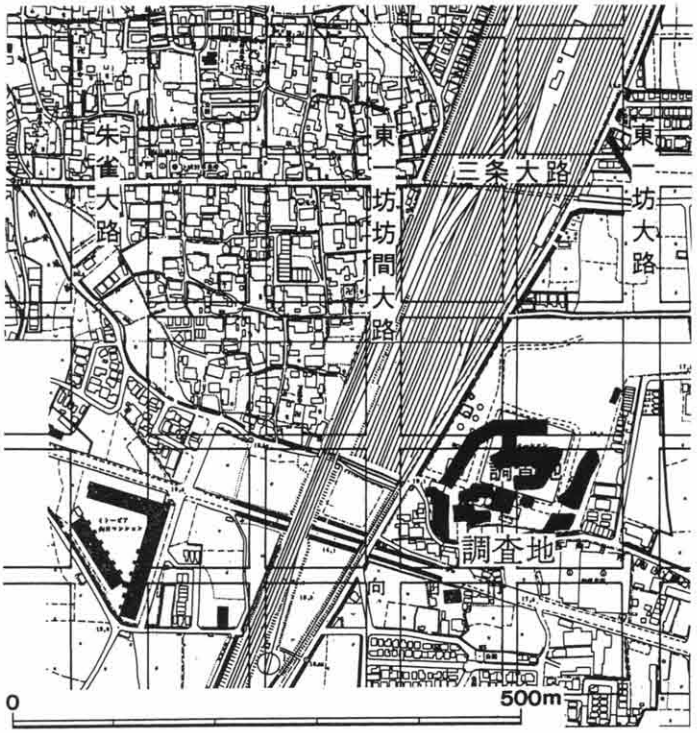
調査概要　今年度は、合計４か所にトレンチを設定し、発掘調査を実施した。

第１トレンチ　調査対象地内で最も西方に位置する。トレンチ西南部では、旧小畑川の肩部を検出しており、また、中央部では氾濫に伴う自然流路と中世素掘り溝を検出した。

第２トレンチ　トレンチの中央で、氾濫に伴う自然流路と中世素掘り溝を検出した。

第３トレンチ　トレンチの全面で、中世素掘り溝を検出した。素掘り溝は、Y=-26,487mを境にして、東半部では南北方向、西半部では東西方向に穿たれており、土地区画が存在していた可能性が高い。また、トレンチ南端では、東西方向のピット列を検出した。

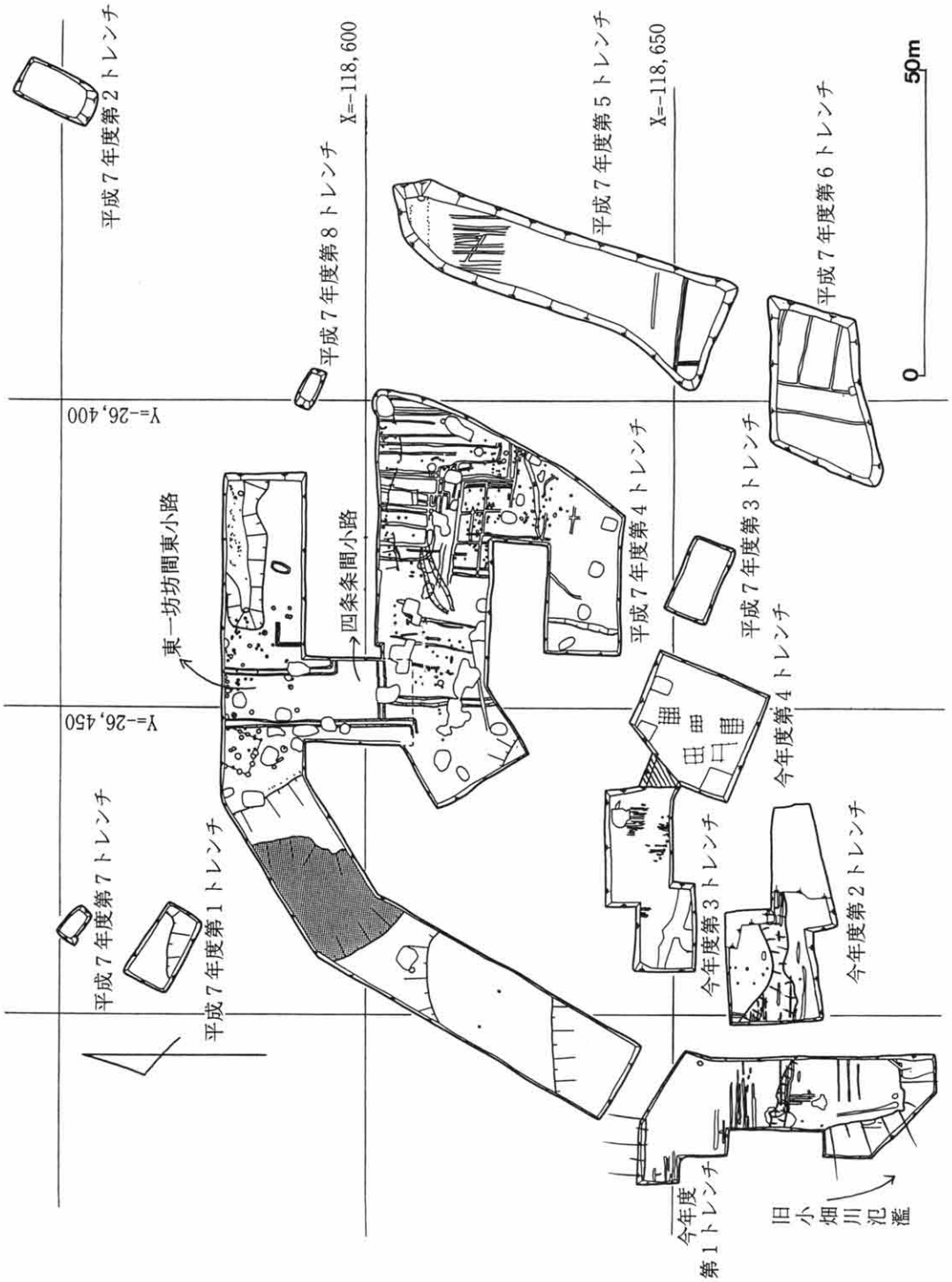
第４トレンチ　トレンチの全面で、南北方向の中世素掘り溝を検出した。また、その溝を切り込むピット群を多数検出した。ピット内から、瓦質土器片・瓦器片・土師器片などが出土したが、細片のため土器の型式的特徴を把握するには至らなかった。しかし、ピット23から中国・明代に流通した洪武通寶が出土しており、ピット群で構成される掘立柱建物跡の年代をほぼ把握できた。洪武通寶の初



第１図　調査地位置図

鋳年代は、1368年であることから、南北朝時代中期以降に集落が形成されたことが推定できる。また、その下層で平安時代後期のピット群を検出した。ピット内から土師器・瓦器などが出土した。

まとめ　第４トレンチの南隣接地には、旧小畑川の流路が推定されている。今回、検出した掘立柱建物跡は、旧小畑川の流路に隣接していることから、少なくとも南北朝時代中期以降には、旧流路一帯が安定した地盤を形成していたことが推定できた。　（小池　寛）



第２図　トレンチ配置図

15. 長岡京跡右京第541次・脇山遺跡

調 査 地　乙訓郡大山崎町大字円明寺小字脇山

調査期間　平成８年９月９日～平成８年11月30日

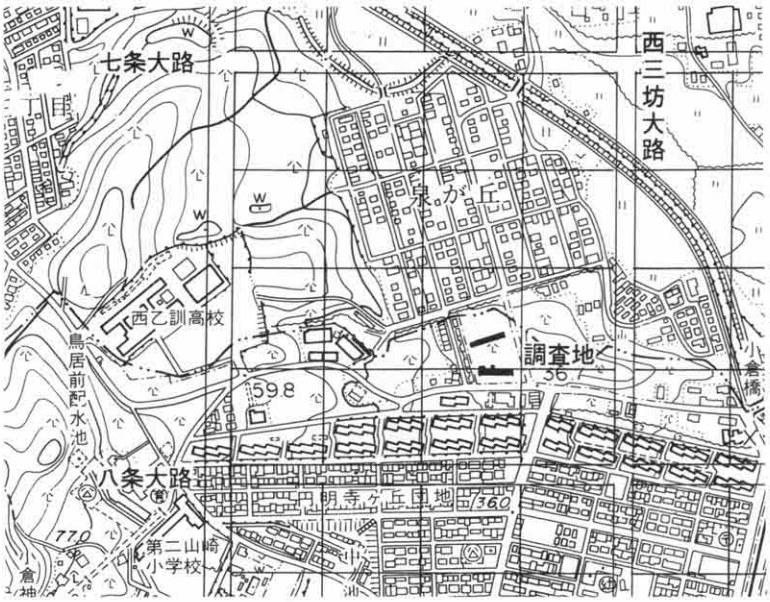
調査面積　約830m²

はじめに　今回の調査は、府営円明寺団地建設に伴い、京都府土木建築部住宅課の依頼を受けて実施した。調査地は、大山崎町北部の長岡京市域と隣接する地点で、長岡京跡右京八条四坊五町・六町(旧右京八条四坊七町)に相当し、弥生時代の遺物散布地である脇山遺跡にも含まれている。立地は、全長約51mの帆立貝式の前方後円墳である鳥居前古墳に近接しており、天王山から派生する丘陵の裾部のなだらかな傾斜地にある。隣接地では、大山崎町教育委員会による発掘調査で、弥生時代後期の土器片とともに、土坑などが見つかっている。今回の調査では、縄文時代中期の土坑、弥生時代中期の方形周溝墓とみられる溝群及び土器溜まり、平安時代初頭前後の溝状遺構などを検出した。

調査概要　調査は、南北２棟の建物建設予定地にそれぞれ試掘トレンチを設定し、南側のトレンチを第１トレンチ、北側のトレンチを第２トレンチとした。その結果、主に第１トレンチを中心に、弥生時代から平安時代初頭頃の遺構や遺物が検出され、それらの遺構の性格を明らかにするため調査範囲を一部拡張した。

以下、今回の調査で検出した遺構の概略を述べる。

第１トレンチ　第１トレンチでは、表土下約40cmほど掘り下げたところで、弥生時代の方形周溝墓や土坑、平安時代初頭前後の溝、及び時期不明の掘立柱建物跡を検出した。トレンチ東側で検出した方形周溝墓とみられる溝群の一つは、東西方向に約7.6mにわたって掘削された溝の底から甕や壺などの弥生土器が出土し、弥生時代中期中葉のものであることが判明した。この溝に直交し、調査範囲外にのびる溝を部分的に検出しており、これらの溝群は、全体として方



調査地位置図(1/10,000)

形の区画をなすと推定される。土器溜まりは、トレンチ中央部で検出しており、長さ6.5m・幅2.2m・深さ0.1～0.2mを測る。遺物は、壺や甕などの弥生土器片とともに、大形の砥石や打製石鏃及び剝片が出土しており、弥生時代中期中葉に比定できる。土器は細かな破片が多く、石材とともに一括廃棄された可能性が高い。平安時代初頭前後とみられる溝は、長さ3.5m・深さ約0.3mを測り、ほぼ真北にのびる。溝の中から、須恵器小形壺１点と土師器椀２点が出土した。掘立柱建物跡は、トレンチ西端で一部検出し、２間×１間以上の規模を持つ。柱間の距離は約2.2mを測り、一辺約0.4mの方形ピットからなり、主軸は、ほぼ磁北に近い方位を取る。主軸が長岡京跡の一般的な建築方位よりやや西に振るため、長岡京期以前に構築された可能性が高い。

第２トレンチ　第２トレンチは、第１トレンチの北側約40mの地点に設定した。遺構の残存状況は悪く、削平が著しい。遺構の主なものは、縄文時代の土坑であり、一部重複する二つの土坑を検出した。規模の大きい東側の土坑は、長さ1.3m・幅0.9m・深さ約0.2mを測る。この土坑は、中位で人頭大の石材とその下層から縄文時代中期の深鉢が出土しており、埋葬施設となる可能性が高い。

まとめ　今回の調査では、従来から弥生土器の散布地として知られていた脇山遺跡の性格を、一部ながら明らかにすることができた。脇山遺跡は、溝状遺構や土器溜まりから、多くの弥生土器片や石器が出土したことで、弥生時代中期中葉を中心とした遺跡であることが判明した。調査区内では、竪穴式住居跡は検出されなかったが、墓域の一画を明らかにしたことで、周辺に集落の存在が推定される。また、歴史時代以降の遺構では、平安時代初頭前後とみられる溝が、部分的ながら検出されたことが注目される。脇山遺跡周辺は、長岡京域の南西隅にあたり、長岡京期から平安時代の土地利用は確認されていなかった地域であり、今回の調査ではこの時期の土地活用の範囲について、再考を促す成果が得られた。

（野々口陽子）

調査地全景（南から）

16. 柿 添 遺 跡 第 3 次

所 在 地　相楽郡精華町北稲八間柿添・下狛柿添

調査期間　平成８年８月19日～12月６日

調査面積　約960m²

はじめに　今回の調査は、八幡木津線道路改良事業に伴って、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。この遺跡は、木津川西岸の丘陵裾に形成された小扇状地上に位置する。昨年度の第２次調査では、古墳時代前期の集落跡の一部や中世の条里水田跡などを検出している。また、試掘調査を行い、溝状遺構などを確認した。

調査概要　今年度は、昨年度の試掘調査で溝状遺構を確認した地点の発掘調査と事業地内での新規の試掘調査を行った。試掘調査で古墳時代前期の遺構などを確認したので、関係機関と協議の上、部分的に拡張して調査を行った。

この調査では、古墳時代前期の溝や土坑、奈良時代の溝、中・近世の耕作溝や杭列などを検出した。古墳時代前期の溝は、南北方向に蛇行気味にのびており、幅約1.8m・深さ約0.9mである。検出長は、約14mである。土師器甕・高杯などが出土した。また、滑石製の有孔円板や手捏ねのミニチュア土器などの祭祀に関係する遺物が出土したのが注目される。土坑は、直径約1.4m・深さ約0.6mの円形土坑で、底部や埋土から土師器甕などが出土した。

奈良時代の溝からは、須恵器・土師器や土馬の足が出土した。昨年度に確認した溝は、ほぼ東西方向にのびており、幅約1.8m・深さ約１mである。出土遺物はなく、時期は不明である。

調査地位置図(1/50,000)

まとめ　今回の調査では、古墳時代前期の遺構を検出した。これらの遺構の個々の性格は不明であるが、昨年度の第２次調査では同じ時期の集落跡の一部を確認しており、それに関係すると考えられる。中世から近世にかけては、田や畑などの耕作地になっていたのではなかろうか。

(引原茂治)

土器出土状況(西から)

府内遺跡紹介

76. 物集女車塚古墳

古墳の概要　「其れ、土師氏はすべて四腹あり。中宮の母家は、これ毛受腹なり。故に、毛受腹は大枝朝臣を賜う。自余の三腹は、或いは秋篠朝臣に従い、或いは菅原朝臣に属する。」『続日本紀』延暦9(790)年12月条のこの記載は、山城の大枝氏が在地豪族ではなく、和泉の毛受(百舌鳥)の土師氏からの分族であったことを物語る。では、大枝氏(土師氏)が山城地域に進出した時期はいつなのであろうか。そのカギとなるのが、ここで紹介する物集女車塚古墳である。

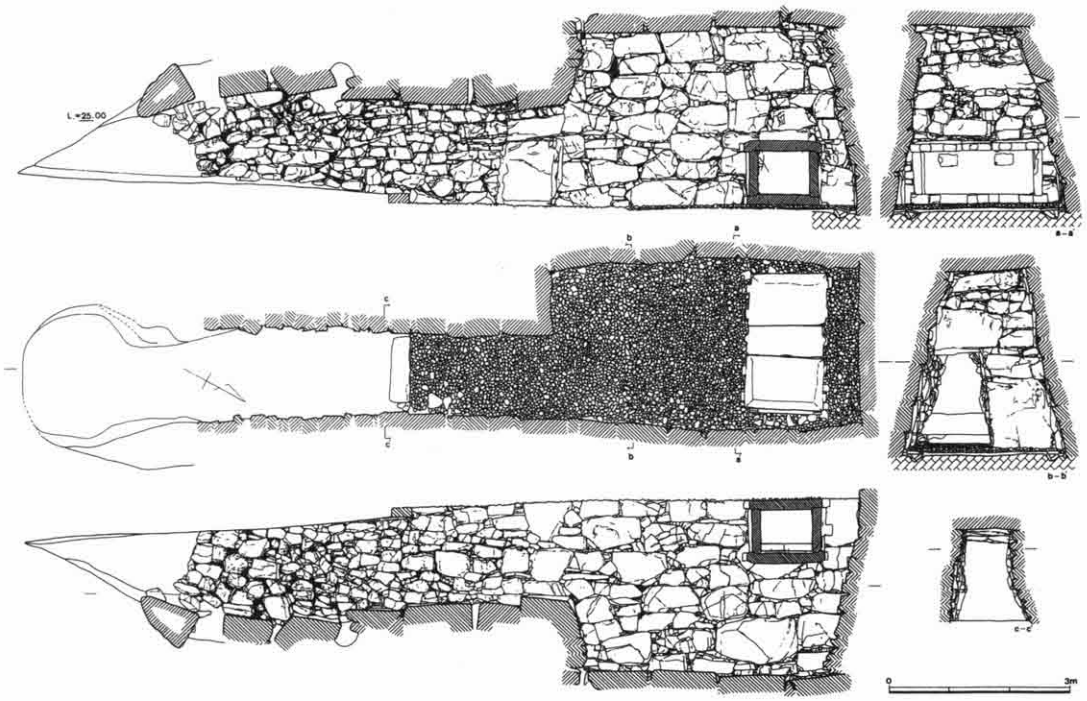
この古墳の調査は古く、1931年に梅原末治氏によって踏査と略測が実施され、前方部が発達した前方後円墳として、その存在が広く知られていた。1983年から開始された発掘調査では、墳丘構築手順、埴輪列、葺石及び主体部の横穴式石室の詳細な状況が明らかになった。墳丘全長43～48m・後円部径31m・前方部幅38mを測る。墳丘は、縞状の粘質土をていねいな版築によって積み上げる。横穴式石室は、盗掘によって内部が荒らされてはいたが、奥壁並行に二上山白石製の家形石棺を納める。平面プランは右片袖で、割石を敷き、床面全体には排水溝がめぐる。最近調査された長岡京市井ノ内稲荷塚古墳と並んで乙訓地域最古のものである。この石室の特徴としては、(1)畿内では珍しく、奥壁と並行に家形石棺を置く、(2)家形石棺は長持形石棺の系譜を引く類例の少ないものである、(3)使用石材には、周囲に露頭のあるチャート、竜山石(長持形石棺の転用材)、紀ノ川流域の緑泥片岩などの多様な石材が使用されている、の3点が指摘される。また、奥壁と側壁では、石室目地に鉄鏃が挿入されており、布帛などを懸掛していたらしい。石室内の副葬品には、土器(須恵器96点・土師器2点)、武器(刀5点以上・刀鞘金具・矛3点・石突3点・鉄鏃130点以上)、馬具(轡2組・杏葉5点以上・雲珠3点・辻金具9点・馬鐸2点・鞍金具(鞍3組・磯金具1組))、装身具(ガラス小玉319点・トンボ玉11点以上・金銅製冠1点)を数える。中でも、馬具と武器類は、石棺の蓋の上面に組まれた石棚状の施設に置かれていた。さらに、墳丘をめぐる円筒埴輪では、すべてに最下段タガに断続ナデという省略手法を用いる。これは、土師氏の本貫地の一つであり、近年発掘調査された奈良市菅原東埴輪窯跡で多

第1図　遺跡所在地(1/50,000)

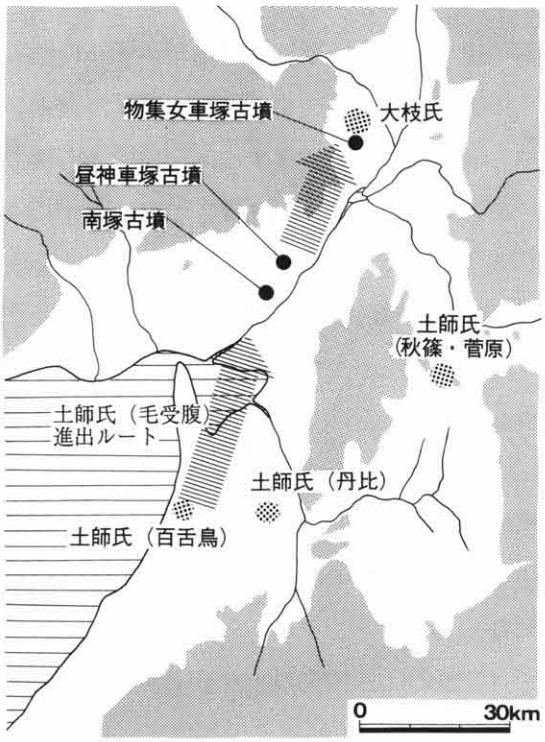
量に検出されている。なお、古墳の年代は、副葬品などから520年頃であると考えられる。

古墳の意義　この古墳は、乙訓地域の首長墓系譜の中で、前代と断絶して出現する後期前方後円墳である。その石室や副葬品組成には上述のような特徴があるが、よく似た古墳に高槻市昼神車塚古墳、茨木市南塚古墳が挙げられる。これらは、同じ淀川水系に属する後期前方後円墳であり、断続ナデ技法の埴輪を樹立し、ほぼ近い時期に築造されたと考えられる。また、いずれも墳丘規模が50m前後と近似する。昼神車塚古墳は内部主体の状況が不明であるが、ていねいな版築による墳丘構築方法や、多様な形象埴輪(堺市百舌鳥梅町窯跡製か？)の樹立が、物集女車塚古墳と共通する。南塚古墳は、物集女車塚古墳と類似する形態の二上山白石製の家形石棺２基を納めるが、初葬の１基は奥壁並行に安置されている。また、玄室平面形もぴたりと一致し、南塚古墳の主体部は物集女車塚古墳と同一の設計で構築されたことが明らかである。さらに、物集女車塚古墳と南塚古墳の副葬品に見える金銅製冠は、全国的にみても出土点数が少なく、その製作と配布には被葬者間の緊密な関連があったらしい。詳細な検討は別稿に譲るが、考古学的な面から見て、この３古墳は密接な関連があることがうかがえる。

ひるがえってみると、実は、この３古墳が所在する地名は、和泉の土師氏との関係が深い。『倭名類聚鈔』によれば、物集女車塚古墳は山城国乙訓郡物集郷、昼神車塚古墳は摂津国嶋上郡濃見郷、南塚古墳は摂津国嶋下郡安威郷にある。濃見郷は土師氏の始祖である野見宿禰の名が連想されるのに対し、安威郷については土師氏との関連は無いが、南塚古墳の近傍に耳原の地名がある。そこには二上山白石製の家形石棺を安置した耳原古墳が所在する。この耳原の文献への初出は不明であるが、『古事記』には、仁徳天皇の陵墓の所在を「毛受之耳原」と記されていて、この地名も毛受腹の土師氏との関連を無視できない。ただし、乙訓郡物集郷では冒頭の大枝氏と



第２図　物集女車塚古墳石室実測図(参考文献１から転載)



第３図　山城地域への土師氏の進出ルート

の関連が想起される一方、『新撰姓氏録』には物集連氏(左京未定雑姓)、物集氏(山城国未定雑姓)が見える。これらの氏族は、清水みき氏によると、有力とはいえない渡来系氏族であり、８・９世紀には秦氏に取り込まれてしまうという。ところが、一方、乙訓には石作郷があって、『三代実録』の貞観元(859)年正月二十七日条では、石作神社に神階昇叙されている。石作氏は『新撰姓氏録』では垂仁天皇の妃日葉酢媛の死にあたって石棺を献じたとあり、『播磨国風土記』印南郡大国里条には石作連が讃岐国から石材を調達したという伝承を持つ。日葉酢媛の陵墓に、埴輪(土師氏)及び石棺(石作氏)を献じたと伝える両氏族が深い関連のあることが想像される。

以上の検討から導かれる結論は、物集女車塚古墳は単に前代の首長墓系譜からの断絶で成立するのみならず、毛受腹の土師氏の山城地域への進出という歴史的意義をも持っていたのである。土師氏は、６世紀中葉に淀川流域に、拠点的に記念碑的な古墳を造営しつつ、山城地域へと進出したと推測される。山城地域に居住した両氏族は、秦氏の奥津城である御室川扇状地上の首長墓群の築造にも関与したかもしれない。古墳時代後期の乙訓地域は、土師氏(大枝氏)―石作氏と秦氏との関係を基軸として理解されるのである。その後、両氏族は古墳築造の終焉によって、自らの生産組織を解体し、秦氏の傘下に編入される。それは、古墳の築造を職掌とした土師氏―石作氏の自衛手段だったのだろう。

古墳の案内　阪急電車東向日駅下車、北東へ徒歩15分。物集女街道沿いにあるため、車に注意。古墳は整備されて公園になっている。また、春と秋には石室が一般公開されている(要申込)。

(河野一隆)

参考文献　１．向日市教育委員会編『物集女車塚古墳』　1988年
２．清水みき「８．古墳時代の乙訓の豪族に関する文献的考察」(注１文献所収)　1988年
３．直木孝次郎「土師氏の研究―古代的氏族と律令制との関連をめぐって―」(『日本古代の氏族と天皇』に所収)　1964年

補記　第61号ならびに第62号掲載の「府内遺跡紹介」に誤りがありました。第61号「73. 宇治二子塚古墳」の63頁の「西殿塚古墳」は「西山塚古墳」の誤りです。また、第62号「74.奉安塚古墳」の68頁の古墳の案内の部分で、奉安塚古墳は現存せず、石室が開口しているのは高龍塚古墳です。また、最寄りのバス停は「佐賀小学校前」ではなく、「報恩寺口」です。ご指摘下さった方々には深く感謝いたしますとともに、今後はこのような誤りがないようにしていきたいと存じます。　(河野一隆・土橋　誠)

77. 長法寺七ツ塚古墳群

長法寺七ツ塚古墳群は、長岡京市長法寺北畠に所在する古墳群で、長法寺の集落の水田に中にあって、ほぼ東西方向に７基が点々と並んでいる。その古墳と古墳の間隔は、ほぼ30mであって、遺跡地図では西から１号墳、２号墳と名付けられている。近年、古墳群周辺が市街地化してきたため、５～７号墳の周囲は、住宅地となっている。この７基の古墳は、いずれも水田耕作や村道の工事などでかなり原形が失われてきている。しかし、江戸時代に描かれた『長法寺村領地絵図』によれば、現在、３号墳、４号墳、５号墳と呼んでいる古墳が、それ以外の１号墳、２号墳、６号墳、７号墳よりも規模が大きく書かれている。現状でもこれらは他よりも大きいため、原形に近い状態で残っているといわれている。

七ツ塚古墳群が著名になったのは、1932年に７号墳が村道工事に伴って土取りされ、主体部の中央付近から須恵器が出土し、1958年にその一部を植田小太郎氏が紹介してからである。その後、水田の中にあった古墳群周辺も、高度経済成長期に次第に開発が進んできた。この古墳群が正式に調査されるようになったのは、1967年になってからである。この時は、京都府教育委員会が主体となっての測量調査が中心であったが、この時に各古墳の墳丘の規模や墳形が明らかになった。

その後、1983年に長岡京市教育委員会によって５号墳の周溝が調査された。これが第１次調査で、それ以後、長岡京市教育委員会が主体となって、1987・88年に第２次・第３次調査として３号墳・４号墳が発掘され、さらに1990年には５号墳の整備に伴って第４次の発掘調査が行われて、古墳群の全体が明らかになった。

各古墳の規模や墳形・主体部については、一覧表に譲るが、古墳群の構成上、次のような注目すべき状況を呈している。つまり、長法寺七ツ塚古墳群では、中心部に帆立貝式古墳を築き、その左右に円墳または方墳が３基ずつ、ほぼ等間隔に築かれていたのではないかという可能性が指摘されている。しかも、各古墳の築造時期は、いずれの古墳も６世紀中頃であって、７基とも比較的短期間に築かれたという性格をもっている。わずか７基ではあるが、一つの古墳群としては注目すべき事実である。

遺跡所在地(1/50,000)

また、埋葬施設は、一つの古墳に１基だけでなく、複数の主体部が存在する点が特徴であるいずれも、主体部は木棺直葬形式である。中で

長法寺七ツ塚古墳群一覧表

号墳	墳形	規模(残存長m)	主体部	副葬品	周溝	築造年代
1	方墳？	10×５×1.25	—	—	？	？
2	？	４×８×１	—	須恵器(採集)	？	
3	方墳	15×15×2.5	木棺直葬４	装身具、鉄製武器、農工具(鹿角装刀子)、須恵器	○	６世紀中頃
4	帆立貝式	全長20、径16×３	木棺直葬３	装身具、鉄製武器、農工具(鹿角装刀子)、須恵器	？	６世紀中頃
5	方墳	18×３	木棺直葬１？	須恵器	○	６世紀中頃？
6	円墳？または方墳	９×２	—	—	？	６世紀中頃
7	円墳？または方墳	—	木簡直葬？	須恵器	？	６世紀中頃

も３号墳では、一つの埋葬主体(箱形木棺)に、成人が２人、子供が１人の３人もの人間が葬られていた。したがって、合計で６～７人の被葬者が一つの古墳に埋葬されていたことになる。

次に副葬品であるが、長法寺七ツ塚古墳群の各古墳は、１基１基が比較的小規模ではあるが、副葬品の数や量がこの規模の古墳にしてはかなり充実しており、内容的には豊富である。具体的には、参考文献にあげた文献に譲りたい。また、いずれの古墳からも須恵器が出土しているが、３号墳からは鉄器類や玉類の出土もあり、中心に位置する４号墳からは、馬具のほかに、鉄製農工具類も出土している。

このような点から、長法寺七ツ塚古墳群の被葬者像を推定すると、この地域の有力者層の墳墓で、かつ短期間に造墓活動を終了していることから、比較的近親者の可能性がある。あるいは、長法寺の地域に勢力のあった在地首長層の家族墓であったのかもしれない。特に、近くには、最近調査された前方後円墳の井ノ内稲荷塚古墳がある。これは、乙訓地域では、いち早く横穴式石室を持ったことからみて、この地域の首長墓と思われる。長法寺七ツ塚古墳群が木簡直葬墓であることは、あるいは埋葬施設に階層制が表現されたのかもしれない。

ところで、この古墳群が短期間で造墓活動が終了してしまうことは、この被葬者の一族が新興の在地首長層にとって代われた可能性もある。また、古墳を造るよりも、首長の権威を示す象徴が別のものへと移った可能性もある。いずれにせよ、畿内の中で、６世紀後半から７世紀初頭頃に古墳を造るよりも新しい権威の象徴が出現したことは確かであろう。　　(土橋　誠)

＜参考文献＞
岩井甍堂「山城葛野乙訓両郡の古墳二三」(『考古界』7-2　考古学界)　1908
植田小太郎「京都府乙訓郡七ツ塚出土の小坩飾付壺」(『史想』第９号　紫郊史学会)　1958
堤圭三郎・高橋美久二「向日丘陵地周辺遺跡分布調査概報」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1968)』　京都府教育委員会)　1968
原　秀樹・中尾秀正「長岡京跡右京第138次(7ANJKK地区)発掘調査概要」(『長岡京市文化財調査報告書』第13冊　長岡京市教育委員会・長岡京跡発掘調査研究所)　1984
中尾秀正・原　秀樹「長法寺七ツ塚古墳群第１次調査概要」(『長岡京市文化財調査報告書』第17冊　長岡京市教育委員会)　1986
山本輝雄「長法寺七ツ塚古墳群第２次調査概要」(『長岡京市文化財調査報告書』第20冊　長岡京市教育委員会)　1988
山本輝雄「長法寺七ツ塚古墳群」(『長岡京市文化財調査報告書』第21冊　長岡京市教育委員会)　1988
岩崎　誠・小田桐淳『長岡京市史―資料編―』　長岡京市役所　1991

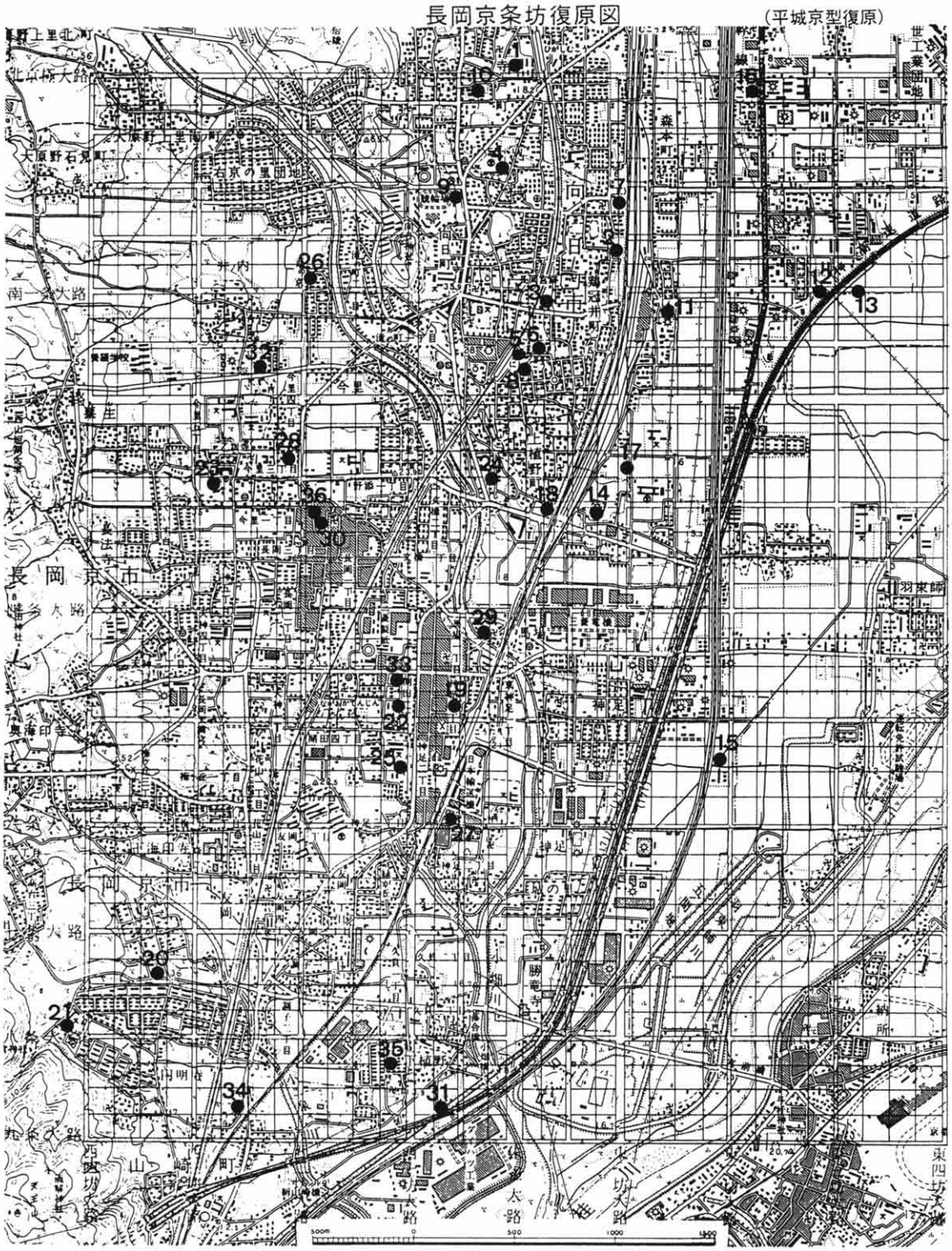
長岡京跡調査だより・60

前回「たより」以降の長岡京連絡協議会は、平成８年10月23日、11月27日、12月25日に開催された。報告のあった京内の発掘調査は、宮内10件、左京域８件、右京域18件であった。京外の６件を併せると42件となる(調査地一覧表と位置図を参照)。この内、宮内第316次の調査成果を簡単に紹介する。

調査地一覧表

(1996年１月末現在)

番号	調査次数	地区名	調査地	調査機関	調査期間
1	宮内第316次(第３調査区)	7ANBKO	向日市寺戸町小佃	(財)向日市埋文	3/4～9/6
	宮内第316次(第４調査区)	7ANBKD	向日市寺戸町小佃	(財)向日市埋文	8/1～10/31
2	宮内第329次	7ANEKL-3	向日市鶏冠井町北井戸1-2	(財)向日市埋文	8/19～10/2
3	宮内第331次	7ANEHJ-2	向日市鶏冠井町祓所21-1	(財)向日市埋文	9/2～11/30
4	宮内第332次	7ANBNB	向日市寺戸町西野辺21-1	(財)向日市埋文	9/2～11/13
5	宮内第333次	7ANFMK-10	向日市上植野町南開45-7	(財)向日市埋文	9/2～9/12
6	宮内第334次	7ANFMK-11	向日市上植野町南開40-1他	(財)向日市埋文	9/18～11/15
7	宮内第335次	7ANDMD-4	向日市森本町前田2-19	(財)向日市埋文	9/24～10/7
8	宮内第336次	7ANFMK-12	向日市上植野町南開24-5	(財)向日市埋文	10/11～10/16
9	宮内第337次	7ANBND	向日市寺戸町西野辺11-1	(財)向日市埋文	10/16～10/30
10	宮内第338次	7ANBHD	向日市寺戸町初田2･3番地	(財)向日市埋文	12/9～12/12
11	左京第381次	7ANEMD-2	向日市鶏冠井町門戸２他	(財)向日市埋文	7/15～11/8
12	左京第384次(A-5)	7ANVKN-9	京都市南区久世東土川町金井田	(財)京都府埋文	4/8～9/30
13	左京第385次(B-5b･B-8)	7ANVKN-9･10	京都市南区久世東土川町金井田	(財)京都府埋文	6/3～
14	左京第389次	7ANFIR-4 FDN-3	向日市上植野町池ノ尻・大門	(財)京都府埋文	7/29～97.1/14
15	左京第390次	7ANMOR-3	長岡京市神足大張9･10	(財)長岡京市埋文	9/24～12/2
16	左京第391次	7ANDTD-2	向日市寺戸町佃28	(財)向日市埋文	11/11～12/20
17	左京第392次	7ANFKD-2	向日市上植野町北ノ田2-1	(財)向日市埋文	11/27～12/20
18	左京第393次	7ANFGN-3	向日市上植野町御妙林13-1	(財)向日市埋文	12/11～12/19
19	右京第532次	7ANMMZ-1	長岡京市神足一丁目16-10	(財)長岡京市埋文	7/1～9/25
20	右京第541次	7ANSTE-18	大山崎町円明寺鳥居前52-2～4	(財)京都府埋文	9/9～11/30
21	右京第542次	7ANTMK-6	大山崎町円明寺小倉口1-14他	大山崎町教委	9/10～10/8
22	右京第543次	7ANKST-7	長岡京市開田二丁目225	(財)長岡京市埋文	9/26～10/17
23	右京第544次	7ANINC-7	長岡京市今里西ノ口15-2他、今里五丁目315-4他	(財)長岡京市埋文	10/1～97.1/10
24	右京第545次	7ANFSR-4	向日市上植野町下川原１番地	(財)向日市埋文	10/2～12/20
25	右京第546次	7ANKKI-4	長岡京市神足三丁目312-2	(財)長岡京市埋文	10/21～11/8
26	右京第547次	7ANGTE-3	長岡京市井ノ内	(財)京都府埋文	10/7～97.2
27	右京第548次	7ANMKI-4	長岡京市東神足二丁目36-1他	(財)長岡京市埋文	10/24～12/16
28	右京第549次	7ANIST-10	長岡京市今里三丁目12-1	(財)長岡京市埋文	11/5～12/27
29	右京第550次	7ANLKR-1	長岡京市馬場二丁目2	(財)長岡京市埋文	11/14～12/13
30	右京第551次	7ANIKE-6	長岡京市長岡三丁目43-11	(財)長岡京市埋文	11/25～97.1/20



▽番号は一覧表・本文（）内と対応

調査地位置図

31	右京第552次	7ANTID	大山崎町下植野飯田地内	大山崎町教委	11/21～11/30
32	右京第553次	7ANIAE-11	長岡京市井ノ内坂川16-1他	(財)長岡京市埋文	12/2～12/6
33	右京第554次	7ANKKN-2	長岡京市開田一丁目121他	(財)長岡京市埋文	12/9～97.1/23
34	右京第555次	7ANSKD	大山崎町円明寺海道5-5他	大山崎町教委	12/2～12/17
35	右京第556次	7ANTMK	大山崎町下植野宮脇地内	大山崎町教委	12/6～97.1/10
36	右京第557次	7ANKOC-1	長岡京市長岡三丁目401-1	(財)長岡京市埋文	12/16～
37	中海道遺跡立会調査第96135次	3NNAGB	向日市物集女町五ノ坪21-1、21	(財)向日市埋文	10/15・16
38	中海道遺跡第42次	3NNANK-42	向日市中海道4・26・16-1・12、御所海道14・15	(財)京都府埋文	10/28～
39	中海道遺跡第43次	3NNANK-43	向日市物集女町堂ノ前7-3	(財)向日市埋文	11/19～12/9
40	物集女城跡第３次	ZM3:9ZMANK-3,3NNANK-44	向日市物集女町中条10他	(財)向日市埋文	11/25～12/26
41	大山崎町第24次	7YYMS'HR-2	大山崎町大山崎堀尻6-1・8-1	大山崎町教委	11/5～
42	山城国府跡第41次	7XYS'EG-2	大山崎町大山崎永福寺12-1	大山崎町教委	10/16～10/23

宮内第316次

（６）

(財)向日市埋蔵文化財センター

宮内第316次調査は、これまでに３か所の調査区を設けて行われた。その結果、推定北京極大路の北側で、かつ朱雀大路延長線に沿った東西で、宮内に施工された規格と同じ官衙区画が形成されていることが判明している。

今回の第４調査区は、推定北京極大路及びその北側を含む場所に位置する。したがって、北京極大路の想定位置で、かつて確認された宮内第154次調査での道幅９ｍを測る東西道路の遺構の延長が確認できるかを検証する調査となった。

その結果、想定された北京極大路は、少なくとも宮城中央付近の状況として、推定線上には、小路が施工され、大路は存在しないことが明らかになった。

よって、北京極大路はこの場所に敷設されておらず、他の場所にその存在を求めなければならないということになる。それは、推定京極大路より以北には求めがたいため、以南に求められよう。そうした場合、北一条大路が遺構・遺物を通じて変換点として認識できることから、そこに境界を設定することが妥当と考えられると報告された。

いずれにせよ、検討すべき問題が多く、今後の調査の結果を待たなければならないと言えるだろう。

（津村正樹）

センターの動向(96.11～97.1)

1．できごと

11．2　府立桃山高校施設開放講座(講師)岩松　保調査員「発掘からみる伏見・桃山城」

5　泉　拓良奈良大学助教授、平遺跡(丹後町)現地指導

平安京跡(京都市下京区烏丸高辻上ル)発掘調査開始

6　堤　圭三郎理事、内里八丁遺跡(八幡市)現地視察

6～13　全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック海外研修(中国山東省)松井忠春主任調査員、岩松　保・田代弘調査員、今村正寿主事参加

8　木村英男常務理事・事務局長、平遺跡現地視察

堤　圭三郎理事、長岡京跡右京第547次調査(長岡京市)現地視察

9～10　日本考古学協会1996年度大会(於：三重県津市)石井清司主任調査員、竹井治雄主査調査員、森下　衛調査員出席

13～14　堤　圭三郎理事、浦入遺跡(舞鶴市)現地視察

13　平遺跡現地説明会

14　全国埋蔵文化財法人連絡協議会役員会(於：東京アルカデイア市ヶ谷)木村英男常務理事・事務局長、園山　哲事務局次長、西村　晃主事出席

浦入遺跡(舞鶴市)現地説明会

宮ノ背遺跡(八幡市)発掘調査開始

15　職員研修(於：当センター)講師：深澤芳樹奈良国立文化財研究所主任研究官「弥生土器の地域色」

19　中澤圭二副理事長、木村英男常務理事・事務局長、浦入遺跡(舞鶴市)現地視察

山中敏史奈良国立文化財研究所集落遺跡調査室長、内里八丁遺跡現地指導

20　椋ノ木遺跡(精華町)関係者説明会

21　井上満郎理事、長岡京跡左京第385次調査(京都市東土川町)、内里八丁遺跡(八幡市)現地視察

22　川上　貢理事、長岡京跡左京第385次調査現地視察

堤　圭三郎理事、平安京跡ほか現地視察

奈具岡南古墳群(弥栄町)現地説明会

25　菟道遺跡(宇治市)ほか発掘調査開始

26　長岡京跡右京第541次・脇山遺跡(大山崎町)関係者説明会

27　長岡京連絡協議会

27～12.11　奈良国立文化財研究所埋蔵文化財発掘技術者専門研修「環境考古課程」村田和弘調査員参加

29　職員研修(於：当センター)講師：向日市消防本部、岡本守貢予防係長「防災・防火について」

30　田辺町歴史講演会(於：田辺町中央公民館)講師：石尾政信調査員「田辺城跡の発掘調査について」、シンポジウム・パネラー：森島康雄調査員「山城国一揆と田辺城」

12．4　公益法人等連絡協議会(於：府民総合

交流プラザ)木村英男常務理事・事務局長、園山　哲事務局次長出席

5　柿添遺跡(精華町)関係者説明会

平遺跡発掘調査終了(8.26～)

全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロックOA委員会(於：大阪市)土橋誠主任調査員出席

6　教育関係法人職員合同研修会(於:府民総合交流プラザ)木村英男常務理事・事務局長、園山　哲事務局次長ほか出席

堤　圭三郎理事、椋ノ木遺跡ほか現地視察

長岡京跡左京第389次調査・中福知遺跡(向日市)関係者説明会

長岡京跡右京第541次・脇山遺跡発掘調査終了(9.9～)

柿添遺跡発掘調査終了(8.19～)

11　木村英男常務理事・事務局長、平安京跡現地視察

12　木村英男常務理事・事務局長、椋ノ木遺跡現地視察

16　職員研修(於：当センター)講師：河野一隆調査員「右片袖の思想」

20　第48回役員会・理事協議会(於:京都市嵐亭)樋口隆康理事長、中澤圭二副理事長、木村英男常務理事、川上　貢、上田正昭、藤井　学、井上満郎、堤圭三郎、中谷雅治の各理事出席

高橋誠一関西大学教授、内里八丁遺跡現地指導

菟道遺跡発掘調査終了(11.25～)

25　長岡京連絡協議会

1．8～17　奈良国立文化財研究所埋蔵文化財発掘技術者特別研修「報告書作成課程」(於：奈良市)辻本和美係長参加

13　藤井　学理事、椋ノ木遺跡現地視察

14　長岡京跡左京第389次調査・中福知遺跡発掘調査終了(7.26～)

17　樋口隆康理事長、長岡京跡左京第385次調査現地視察

21　天王山古墳群(久美浜町)発掘調査終了(6.10～)

22　長岡京連絡協議会

23　内里八丁遺跡(第３～６遺構面)現地説明会

24～2.6　奈良国立文化財研究所埋蔵文化財発掘技術者専門研修「信仰関連遺跡調査課程」(於：奈良市)小池　寛調査員参加

29　木村英男常務理事・事務局長、森垣外遺跡(精華町)現地視察

30　奈具岡南古墳群(弥栄町)発掘調査終了(4.11～)

31　職員研修(於：当センター)「同和職場研修Ⅱ」

(安藤信策)

受贈図書一覧（8．11～9．1）

(財)岩手県文化振興事業団 埋蔵文化財センター	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第228集 柳之御所跡
(財)いわき市教育文化事業団	荒田目条里遺跡木簡調査略報、いわき市埋蔵文化財調査報告第44冊 大平Ｂ遺跡・大平Ｃ遺跡、同第45冊 綱取貝塚
(財)栃木県文化振興事業団 埋蔵文化財センター	財団法人 栃木県文化振興事業団年報 平成７年度、栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター年報 第６号
(財)千葉県文化財センター	研究連絡誌 第45～47号、千葉県文化財センター調査報告第276集 主要地方道松戸野田線埋蔵文化財調査報告書、同第277集 一般国道464号単道路改良事業埋蔵文化財調査報告書、同第278集 一般国道296号国道道路改良事業埋蔵文化財調査報告書１、同第279集 一般国道296号国道道路改良事業埋蔵文化財調査報告書２、同第280集 主要地方道多古笹本線埋蔵文化財調査報告書２、同第281集 千葉市西唐沢遺跡、同第282集 成田市松崎遠原遺跡、同第283集 多古町千田台遺跡、同第284集 木戸台・町原古墳群・木戸台遺跡、同第285集 大堺・塔ノ前遺跡、同第286集 大多喜町市場台遺跡、同第287集 大多喜町女ヶ谷遺跡、同第288集 袖ヶ浦市堂庭山Ｂ遺跡、同第289集 市原市武士遺跡１、千葉県文化財センター年報No.21
(財)船橋市文化・スポーツ公 社埋蔵文化財センター	埋蔵文化財センター調査報告書第１集 中嶋遺跡、同第２集 中野木台遺跡群（４）、(財)船橋市文化・スポーツ公社埋蔵文化財センター年報１ 平成７年度
(財)山武郡市文化財センター	(財)山武郡市文化財センター発掘調査報告第28集 大網山田台遺跡群Ⅱ、同第33集 小泉遺跡、同第34集 浅間台遺跡、同第35集 滝木浦遺跡、同第41集 山田・宝馬古墳群、(財)山武郡市文化財センター年報No.11
(財)君津郡市文化財センター	君津郡市文化財センター年報No.13、(財)君津郡市文化財センター発掘調査報告書第103集 大竹遺跡群発掘調査報告書Ⅳ、同第107集 市宿横穴墓群発掘調査報告書、同第109集 中尾遺跡群Ⅰ、同第110集 泉遺跡発掘調査報告書Ⅰ、同第113集 高砂遺跡、同第114集 兎谷・上時田・下時田・向台木・台木Ｂ遺跡、同第115集 上ノ山Ａ・上ノ山Ｂ・下根田Ａ・下根田Ｂ・御所塚遺跡、同第118集 奥仲谷古墳群発掘調査報告書、同第120集 大井戸八木25号墳・大井戸八木遺跡、同第121集 谷ノ台遺跡（Ｂ地点）、同第122集 清水沢遺跡発掘調査報告書、同第123集 南子安金井崎遺跡
(財)東京都教育文化財団 東京都埋蔵文化財センター	東京都埋蔵文化財センター調査報告第32集 多摩ニュータウン遺跡、同第33集 多摩ニュータウン遺跡、同第34集 多摩ニュータウン遺跡 先行調査報告４、同第36集 多摩ニュータウン遺跡 先行調査報告５
(財)かながわ考古学財団	年報３ 平成７年度、かながわ考古学財団調査報告５ 青野原バイパス関連遺跡、同９ 宮ヶ瀬遺跡群Ⅶ
(財)山梨文化財研究所	帝京大学山梨文化財研究所研究報告 第７集
(財)新潟県埋蔵文化財調査 事業団	新潟県埋蔵文化財調査報告書第76集 江内遺跡、同第78集 堂付遺跡・百塚東Ｅ遺跡・百塚西Ｃ遺跡・割目Ｂ遺跡、同第79集 水久保遺跡・宮平遺跡Ⅱ、 同第81集 上小島遺跡、同第82集 獅子沢遺跡
富山県埋蔵文化財センター	平成８年度特別企画展図録 文字の世界
(財)瀬戸市埋蔵文化財センター	古瀬戸をめぐる中世陶器の世界
三重県埋蔵文化財センター	日本考古学協会 1996年度三重大会シンポジウム１ 水辺の祭祀、同２ 国府
(財)滋賀県文化財保護協会	ほ場整備事業関係遺跡発掘調査報告書ＸＸⅡ－４ 在士北遺跡・尼子遺跡・小川原遺跡２、同ＸＸⅢ－３ 北落古墳群Ⅲ・金屋南古墳群、同ＸＸⅢ－４ 尼子南遺跡・尼子西遺跡、金屋南古墳群発掘調査報告書、霊仙寺遺跡発掘調査報告書Ⅱ、長束三坊・中堂遺跡発掘調査報告書、岡遺跡発掘調査報告書
(財)大阪府文化財調査研究 センター	日置荘遺跡、(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第77輯 仏並遺跡Ⅲ、同第84輯 上町遺跡Ⅱ、同第87輯 三軒屋遺跡Ⅱ、同第91輯 志紀遺跡、同第92輯 東奈良遺跡、大阪府立弥生文化博物館平成９年度冬季企画展 発掘速報展 大阪'97

(財)大阪市文化財協会	森の宮遺跡Ⅱ
桜井市立埋蔵文化財センター	平成８年度冬季企画展 古代桜井の木製品
(財)松山市生涯学習振興財団	平成８年度特別展 葉佐池古墳、松山市埋蔵文化財調査年報Ⅷ、松山市文化財調査報告書第49集 松山大学構内遺跡Ⅱ、同第52集 福音寺地区の遺跡、同第54集 東本遺跡４次調査・枝松遺跡４次調査、同第56集 来住廃寺
小郡市埋蔵文化財調査センター	一ノ口遺跡Ⅰ地点 小郡市文化財調査報告書第86集、三国地区遺跡群４ 同第97集、三国地区遺跡群５ 同第98集、大保西小路遺跡 同第99集、福童山の上遺跡２・小郡正尻遺跡２ 同第100集、苅又地区遺跡群Ⅰ平成２年度調査報告 同第101集、小郡正尻遺跡３ 同第107集、小郡大保道遺跡 同第108集、三国地区遺跡群６ 同第109集、三国地区遺跡群７ 同第111集
松前町教育委員会	史跡福山城ＸⅡ 平成６年度発掘調査概要報告
仙台市教育委員会	仙台市文化財調査報告書第164集 南小泉遺跡、同第201集 今泉遺跡
富士見市教育委員会	富士見市遺跡調査会調査報告第40集 八ヶ上遺跡第11・13地点発掘調査報告書、同第43集 谷津遺跡第17地点発掘調査報告書、同第44集 南通遺跡第14地点発掘調査概要報告書、同第45集 富士見市内遺跡Ⅲ、同第47集 富士見市内遺跡Ⅳ
北区教育委員会	北区埋蔵文化財調査報告第20集 南橋遺跡Ⅱ
川崎市教育委員会	川崎市文化財調査集録第30集、同第31集、川崎市東柿生小学校内遺跡発掘調査報告書、馬絹古墳保存整備・活用事業報告書、南谷一遺跡発掘調査報告書
鎌倉市教育委員会	由比ガ浜中世集団墓地遺跡発掘調査報告書
松任市教育委員会	松任市上二口Ｂ遺跡、松任市宮永市カイリョウ遺跡・宮永市カキノキバタケ遺跡、東大寺領横江庄遺跡Ⅱ、松任市三浦・幸明遺跡
小松市教育委員会	古府しのまち遺跡
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター	福井県教育庁埋蔵文化財調査センター年報10 平成６年度
菊川町教育委員会	平成７年度文化財事業年報 第３号、菊川町埋蔵文化財報告書第36集 殿ヶ谷遺跡第４次発掘調査報告書、同第37集 猿田谷遺跡Ⅱ発掘調査報告書、同第38集 杉の谷遺跡発掘調査報告書、同第41集 久保之谷遺跡発掘調査報告書
豊橋市教育委員会	豊橋市埋蔵文化財調査報告書第29集 大西貝塚(Ⅱ)、同第30集 鎌田遺跡・西新屋遺跡・西新屋古墓群、同第31集 南田遺跡・瓜郷遺跡(Ⅲ)、同第32集 百々池古窯・東田遺跡(Ⅱ)
八日市市教育委員会	雪野山古墳の研究
阪南市教育委員会	阪南市埋蔵文化財報告ＸＸ 波有手遺跡、同ＸＸⅠ 阪南市埋蔵文化財発掘調査概要ＸⅠ
岸和田市教育委員会	岸和田市文化財調査報告４ 山直中遺跡、第９回濱田青陵賞授賞式
羽曳野市教育委員会	第14回歴史資料室テーマ展示 食卓の考古学
太子町教育委員会	太子カントリー倶楽部建設に伴う植田遺跡ほか発掘調査報告書
三田市教育委員会	ミニミニ企画展第21弾 おかあさんの考古学
高砂市教育委員会	高砂市文化財調査報告11 高砂町遺跡
小野市教育委員会	播磨国大部荘現況調査報告書Ⅵ、シンポジウム『城はなぜ築かれたか』記録集、小野の文化財
加古川市教育委員会	加古川市文化財調査報告14 加古川市文化財図録
島根県教育委員会	いにしえの島根ガイドブック 第１～８巻
庄原市教育委員会	庄原市文化財調査報告書第４集 門田下古墓
府中市教育委員会	府中市内遺跡１ 府中市埋蔵文化財調査報告第６冊、府中市内遺跡２ 同第７冊
総社市教育委員会	総社市埋蔵文化財調査年報６
徳島市教育委員会	徳島市埋蔵文化財発掘調査概要６、第16回埋蔵文化財資料展「阿波を掘る」企画展示
北九州市教育委員会	北九州市の文化財ガイド(古墳編)
佐賀市教育委員会	佐賀市文化財調査報告書第64集 御手水遺跡Ⅱ、同第65集 琵琶原遺跡４区・草場遺跡１区、同第65集 藤附遺跡１区・大塚遺跡１区・大日遺跡２区、同第67集 上揚遺跡３区、同第68集 佐賀市埋蔵文化財確認調査報告書、同第69集 来迎寺遺跡(２・３区)・

	若宮原遺跡、同第70集　西千布遺跡（１区）・友貞遺跡（８・９・10・11区）、同第71集　修理田遺跡Ⅰ、同第72集　忠兵衛屋敷遺跡、同第73集　下和泉一本椎遺跡Ⅰ、同第74集　下村遺跡、同第75集　東千布遺跡Ⅱ、同第76集　佐賀城跡、同第77集　東名遺跡
千代田町教育委員会	千代田町文化財調査報告書第20集　詫田西分遺跡Ⅱ区の調査
人吉市教育委員会	人吉市文化財調査報告第16集　史跡人吉城跡Ⅶ
大分県教育委員会	大分県埋蔵文化財年報４、大分県文化財調査報告第93集　横手遺跡群発掘調査報告書、同第94集　徳瀬遺跡、府内城三ノ丸北口跡、岩崎横穴墓、九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書（５）
東北歴史資料館	東北歴史資料館　研究紀要第22巻
(社)日本金属学会附属金属博物館	金属博物館紀要　第26号
群馬県立歴史博物館	群馬県立歴史博物館調査報告書第７号、群馬県立歴史博物館紀要第17号
埼玉県立歴史資料館	研究紀要　第18号
国立歴史民俗博物館	国立歴史民俗博物館研究報告第67集、「非文献資料の基礎的研究－古印－」報告書
千葉県立房総風土記の丘	平成８年度企画展　ちば３万年の遺産
流山市立博物館	流山市立博物館　年報No.18′96
出光美術館	出光美術館　館報第96号
高岡市立博物館	高岡市立博物館年報第10号　平成７年度
福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館	一乗谷朝倉氏遺跡　平成７年度発掘調査環境整備事業概要(26)、一乗谷朝倉氏遺跡資料館紀要1995、第９回企画展　海のネットワーク
豊田市郷土資料館	豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第５集　梅坪遺跡Ⅲ、同第６集　神明遺跡
大阪府立弥生文化博物館	国際歴史シンポジウム資料集　漢とローマ、弥生文化博物館研究報告　第４集
大阪府立近つ飛鳥博物館	平成８年度冬季企画展　北の列島文化
八尾市立歴史民俗資料館	河内愛宕塚古墳とその時代
堺市博物館	大王墓の時代
播磨町郷土資料館	ふるさとの遺跡
香芝市二上山博物館	第10回特別展　人類の起源とサヌカイト
岡山県立美術館	Female Identity　女はどう表現されてきたか
広島県立歴史博物館	海の道から中世をみるⅡ
福岡市博物館	開館５周年記念特別企画展　対外交流史Ⅱ、福岡市博物館研究紀要　第６号、福岡市博物館　年報３、平成５年度収集　収蔵品目録11
九州歴史資料館	九州歴史資料館　研究論集21、九州歴史資料館年報(平成７年度)
熊本市立熊本博物館	熊本博物館館報No.８　1996
大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館	宇佐歴史民俗資料館年報　平成７年度
湖巌美術館	湖巌美術館研究論文集　１號
東北大学埋蔵文化財調査研究センター	東北大学埋蔵文化財調査年報６、７
茨城大学人文学部	博古研究　第９～12号
早稲田大学第一文学部	古代　第102号
日本大学史学会	史叢　第56号
専修大学考古学会	専修考古学　第６号
大阪大学文学部考古学研究室	雪野山古墳の研究
神戸女子大学史学会	神女大史学　第13号
広島大学文学部考古学研究室	広島県蒲刈町町制施行40周年記念　1996古代の塩作りシンポジウム、辰の口古墳発掘調査概報
山口大学埋蔵文化財資料室	山口大学構内遺跡調査研究年報ⅩⅢ

山武考古学研究所	佐倉道南遺跡、夏見大塚遺跡、高野台遺跡・原畑遺跡・稲荷山遺跡、吉田遺跡発掘調査報告書、前橋城三ノ丸遺跡発掘調査報告書、石関西簗瀬遺跡・西片貝源田島遺跡、清水Ⅰ遺跡、布施大塩遺跡、観音寺原Ⅰ・Ⅱ遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書、倉賀野中里前遺跡 高崎市遺跡調査会報告書第45集、双葉町Ⅰ遺跡 同第48集、下小鳥町頭Ⅱ遺跡 同第49集、中尾村前Ⅴ遺跡 同第51集
(財)同仁会	立木南遺跡
(株)名著出版	歴史手帖 第24巻12号、同第25巻1、2号
朝日新聞社	日本の発掘 1991－1995 新遺跡カタログVol. 4
国立国会図書館	日本全国書誌 第48号(通号2105号)
文化庁	平成4・5年度実施報告 遺跡保存方法の検討
宮内庁書陵部	書陵部紀要所収 陵墓関係論文集Ⅲ
歴史研究会	歴史研究 第424号
四ッ谷前地区遺跡調査団	日野市四ッ谷前遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ
(財)韓国文化研究振興財団	青丘学術論集 第9集
浜松市埋蔵文化財調査事務所	半田山C27号墳、宮竹野際遺跡4
厚木整理事務所(本郷遺跡調査団)	海老名本郷(XⅣ)
てんびんの里文化学習センター	近江商人博物館平成8年度秋季企画展 古代の交易
(財)古代學協會	古代文化 第48巻第11、12号、同第49巻第1号
平成8年度訪中団	臨淄と斉国、田野考古学、東夷考古、山東名勝古迹、琴島瑰宝、山東龍山文化研究文集、斉魯名物博覧、萬乗一覧、山東大学考古専業創建二十周年文集、泗水尹家城、安丘董家庄漢画像石墓、中国歴史 第一冊、山東文物精萃
妙見山麓遺跡調査会	下上津遺跡
六甲山麓遺跡調査会	熊内遺跡 第2次調査、古寺山遺跡調査と多聞廃寺址概要
朝鮮学会	朝鮮学報 第160輯
奈良県立橿原考古学研究所	平城京右京一条北辺二坊三坪・四坪 奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第67冊、南郷遺跡群Ⅰ 同第69冊、久安寺モッテン墓地跡 奈良県文化財調査報告書第70集、高家遺跡群Ⅰ 同第72集、奈良県遺跡調査概報1991年度(第1分冊)、同1992年度(第2分冊)、同1993年度(第2分冊)、同1995年度(第1、2分冊)、橿原考古学研究所年報21 平成6年度、橿原考古学研究所紀要 考古學論攷第20冊、口宇陀地域遺跡分布地図、唐招提寺防災施設工事・発掘調査報告書
木簡学会	木簡研究 第18号
博物館等建設推進九州会議・編集委員会	文明のクロスロード Museum Kyushu 季刊第14巻・第4号 通巻54号
(社)嶺南埋蔵文化財研究院	金泉市文化遺蹟地表調査報告書、慶州市文化遺蹟地表調査報告書、第2回嶺南埋蔵文化財研究院調査研究発表会、嶺南埋蔵文化財研究院
(財)京都市埋蔵文化財研究所	つちの中の京都「リーフレット京都」合冊、平成6年度 京都市埋蔵文化財調査概要、研究紀要 第3号、京都発掘20年
城陽市教育委員会	城陽市史年表、城陽市史 第2巻、城陽町史 第1巻、城陽の文化財案内－遺跡・遺物を中心に－、城陽の文化財案内－神社・仏像を中心に－
八幡市教育委員会	ほ場整備事業地内遺跡第3次発掘調査概報 八幡市埋蔵文化財調査概報第19集、出垣内遺跡第2次発掘調査概報 同第20集、女郎花遺跡第2次発掘調査概報 同第21集
京都府京都文化博物館	京都・激動の中世
京都府立丹後郷土資料館	丹後王国の風景 特別展図録27
京都府立山城郷土資料館	山城郷土資料館報 第13号(1995)、展示図録16 南山城の幕末維新
三和町郷土資料館	平成8年度企画展 懐かしのアルバム
向日市文化資料館	企画展 信長・秀吉と西岡
城陽市歴史民俗資料館	特別展「古代役人のしごととくらし」
京都大学考古学研究会	第47とれんち

亀岡市	新修 亀岡市史 資料編第四巻
大野左千夫	紀北考古学談話会会報 合冊２、大唐王朝の華－都・長安の女性たち
堅田　直	平遺跡調査概要　考古学シリーズⅠ、渡来系氏族と古代寺院、考古学における計量分析－計量考古学への道Ⅳ、Ⅴ、第８回考古学におけるパーソナルコンピュータ利用の現状、古代寺院の移建と再建を考える
中尾芳治	アンコール遺跡修復とカンボジアへの文化協力、第３回狭山池フォーラム　日本最大の狭山池と天平の僧 行基
中嶋利雄	上宮津村史
西垣健一	つどい100号発行記念特集
水野正好	よみがえる藤原宮と京、朝地田村遺跡発掘調査報告書Ⅲ、奈良大学平城京発掘調査報告書第２集 平城京左京四条三坊十一坪発掘調査報告書
森島康雄	『出土銭貨』第６号、中世土器研究　合冊(71～80号)、中近世考古学を語る会、中世土器の基礎研究ＸⅠ、第15回研究集会報告資料 基本資料の再検討

編集後記

情報63号が完成しましたのでお届けします。

本号では、今年度に当調査研究センターが実施した調査のうち、特に成果のありました調査地について、抄報を中心に掲載いたしました。特に、最古の製塩土器が見つかった平遺跡は、今年度の調査の中でも、各時代にわたって成果のあったもので、ここに掲載したのはその一部にすぎません。今後も、各遺跡の調査成果をできるだけ載せていきたいと存じます。

（編集担当＝土橋　誠）

京都府埋蔵文化財情報 第63号

平成９年３月26日

発行　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617　向日市寺戸町南垣内40番の３
Phone（075）933-3877（代）

印刷　中西印刷株式会社
〒602　京都市上京区下立売通小川東入
Phone（075）441-3155（代）

KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER